現代における経済と人間

――誤解と偏見を超えて未来へ――

永安幸正

一　経済の意味が変わる？

今日ほど複雑な意味で、人類が経済に悩まされる時代は、かつてなかったといえよう。経済問題の有様と意味が変わり、著しく複雑になってしまったからであろうか。したがって、経済学も、変質し複雑化した経済を解明するため、「複雑系の経済学」といった方向すら唱えられて来ている（塩沢由典『複雑系経済学入門』生産性出版、など。複雑系については、吉永良正『「複雑系」とは何か』講談社現代新書、がある）。

一体、経済はどのように変質したのか、またしつつあるのか。

後年、偉大となった人物が、まだ若いころには食うや食わずの貧乏に喘（あえ）いだ、というのは、これまではよく聞かれた物語である。だから貧乏とは、現代はどうか分からないが、もとは人間を鍛え上げるものであったのだろうか。

人は、豊かさからよりも、苦難からこそ学ぶともいう。苦難を通じてこそ喜びを得るともいう。

五木寛之さんといえば、押しもおされぬ一流作家である。まさか、今では食うに困るほどの貧乏ではいらしゃらないであろうと推測するが、その五木寛之さんの『人生の目的』（幻冬社）には、一九五〇年代、学生時代にいかに貧乏であったか、が印象深い筆致で回想されている。

人生には目的はない、目的を探するということ自体が人生の目的なのである、という趣旨が書かれている。

五木さんは、早稲田大学――卒業しない退学組こそが偉い人になるというのでも有名な大学――に入るには入ったのだが、授業料滞納で抹籍されてしまったのだという。食うことと、授業料を払うお金をためることだけが、目標の生活だったという。五木さんは、その後、三〇年以上たってから滞納分の授業料を納め、正式に中退されたのだそうだ。これは偉い。

ところが一方、一般人はまだ同じように貧しい時代なのに、若くして『太陽の季節』を書いた石原慎太郎さん（一橋大学のご卒業）は、実業家としての父君の富のお陰か、先祖の余徳か、学生時代にヨットを楽しまれたくらいの上流階級の方である。むろん、かの「裕次郎」さんもご一緒にである。普通の学生からすれば、それは、うらやましい限りの学生の生活であったといえる。「実像」はそんなものではなかったかもしれない。

言うまでもなく石原さんも苦労をされたと思うが、映画の華やかさも手伝ってか、すくなくともそういう印象をもたれたのは間違いない。人の運命の、根底は共通でも、外に現れた姿は一通りではない。我々は、それに幻

惑され、共通の本質を透視できない。

かといって私は、ケネディのように、「人生はアンフェアだ」とは言わない。ケネディいわく、戦争に征って帰らぬ人もいる。帰ってくるには帰ってくるけれど傷を負ってくる人もある。戦争に行かない人もいる。人生はアンフェアだ、と。（J・F・ケネディ『演説集』）

私は、これらの方々のすこしあとの世代に属する。さすがに神社の軒下に寝たことは無かったけれども、数日にわたって一銭も無い生活というのは、幾度も経験せざるをえなかった。読み終えた本を質屋にもって行って、なけなしの金に換えたこともあった。朝暗いうちに起きて行って、近所の公営ゴルフ場での順番取りに並ぶというようなアルバイトもやった。ほとんどの学生は「豊かさ」どころではなかった。でも精神は張り切っていた。

だから昔は、経済問題といえば決まって、食う物や着る物が無い、物資が不足する、生活が貧乏である、失業する、とこういう種類の「貧困問題」のことであった。それゆえ、経済とは「欠乏の解決」であった。一九二〇年代、大東亜戦争よりずっと昔の大正五年、河上肇先生の『貧乏物語』という本が読まれた（現在、岩波文庫に収められている）。

「人はパンのみにて生くものにあらず、されどまたパンなくして人は生くものにあらず」と書き出しで著者は宣言している。

それは、貧乏がいかに人間性を貶（おとし）め、我々の幸福を妨げるものであるか、どうすれば貧乏状態を抜け出せるか、を世間の人々に語りかけて、ベストセラーとなった。貧困の問題が世間でまことに深刻であったか

らである。そして皮肉なことに、その印税は少なくなかったとも伝えられる。

それゆえに、経済学とは、貧困問題解決のための学問にほかならなかったわけである。

現代では、もはやしかし、経済問題は、「欠乏」という意味の貧乏問題のみではなくなった。いな、正確に言うと、依然として貧乏問題ではあるけれども、貧乏の質が変質してしまったというべきだろう。経済問題はまず、一見すると「豊かさ」の経済問題となった。貧困の経済問題でなく、豊かさの質を問うというものになった。

一九二〇、三〇年代に、ケンブリッジ大学のジョン・メイナード・ケインズという経済学者は「豊かさの中の貧困」を問題にして、その解決策を模索した。豊かさの中の貧困というのは、一つのパラドックスである。物は有り余るほどなのに、いな、有り余るからこそ、人々は貧乏となり物が買えなくなった。そして失業が出るからだ、という状態を指す。

だが、今日ではそれどころではない。経済はもっとはるかに深い意味で変質したのではないか。それは、一体どういう変質なのだろうか。

経済（エコノミー）という言葉は、これまでにもいろいろな意味合いで使われてきている。それには、後に述べるように、明快に、およそ三つの意味が込められてきているのだが、しかし同時に、経済には根深い誤解もまとわりついていて、その本来の在り方が理解されていないきらいがある。

特に、何が正しい生き方かを探求し倫理道徳を唱える人々には、その種の誤解と偏見にとらえられやすいという傾向がある。

経済に関する誤解と偏見

誤解と偏見	真の経済、変わる経済
(1) 人間活動とその対象 経済は物欲のための物質獲得の活動	物質だけが対象ではない 物欲に駆られた活動ではない
(2) 人間関係 経済は交換と売買の活動	交換には物々交換もある 売買は貨幣を媒介に市場経済となる また売買でない非市場経済もある
(3) 目的と手段の連関 経済は目的手段をめぐる合理的行動	目的の選択と手段の選択の組合せ 技術と経済は異なる 合理主義と効率主義への批判は的外れ 私的経済と社会経済は違う
(4) 物質と情報 経済は物質と情報の双方に関係	物質主義という批判は的外れ 情報も取り扱う 情報は乗る者、物質は乗り物 ヴァーチャル・リアリティも重要
(5) 物と心 時代は物から心へと動くか	物も変わり心も変わる 目的と手段を浄化すべし
(6) 新しい経済原理 市場とともに非市場も 地球環境問題と持続的発展	売り買いでない人間関係も重要 節欲し知足安分たるべし 内的世界を開拓し充実すべし

経済は、価値の低い活動なのだ、と見てさげすんだり、経済は物にかかわる活動で、それよりも「心の方が大切だ」と言う。あるいは、経済にかかわる人々は、物欲に捕らわれた人種であるとか、ガリガリのエゴイストだ、とかいう理解である。これは皆誤解であり、偏見である。

こういう誤解や偏見をもつと、現代の複雑な状況を十分に観察することから目を背けさせるから、現実に疎くなり本当の課題への取り組み方を見えてこなくさせる。どうも、そのような道徳論者が現在、多過ぎるのではないだろうか。

私自身も、そうした人々の端くれであるから、よくよく自省しなくてはならないと考えている。私のこの誤解と偏見への反論にもまた、誤解、偏見が混じるかも知れない。ゆえに、実業の人々から直に学ぶことは、まことに多い。「事実を見よ」というのが、私への指針である、と。

そこで、これから、経済の新たな現象を取り上げ、その意味を探求して、経済というものにかかわる誤解や偏見を解きほぐし、進んで現代の経済現象の変わりよう、そして我々の生き方、考え方を考察してみることにしたい。

二　人生観と経済の見方

(一)　先哲の教えは経済蔑視の教えか？

貧困問題が経済問題だ、というのは経済が物質に関係するからである。我々は、何かについての知識が不足しても、知識の貧困とはいうが、普通にはそれを経済問題とは思わないであろう。遊び相手が見つからなくとも、それを経済問題とは考えないだろう。しかし、会社のリストラでその父親が馘首（かくしゅ、くび）になった学生がいて、学費未納で大学を除籍されたり、家族が食事や住居に事欠くようになると、それは経済問題だということになる。

だから、経済とは、なによりも我々が生きて行くうえで必要不可欠な「物質獲得」の営みのことである。我々人類が生きていくには、物質を生産し、あるいは他から調達して、お互いの間でその物質を分配し、分配されたものを消費する、というプロセスがなければならない。

ところが、人間を正しく導くべき多くの宗教者や倫理道徳論者が、往々にしてこういう厳粛な事実から、目を逸らすのである。倫理道徳は「精神の問題」だ、「物質的欲望」を抑えることが肝心だとか何とかいって、物質獲得にあくせくせざるを得ない普通の人々の悩みに、あまり熱心に耳をかそうとしない。

その理由の一端は、どうやら古代の宗教にもあるようだ。

お釈迦さまの古い言葉を集めた『スッタニパータ』（岩波文庫）という経典がある。その中には、出家者は物を造ったり売ったりする職業から離れるように、という教えがある。農業者、工業の職人、商人などをやっていては、仏様に救われませんよ、ということなのだろうか。

孔子先生の『論語』（岩波文庫）はどうか。『論語』には、「士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、未だともに議に足らず」という言葉がある。物欲にとらわれるなという戒めである。仁、義、礼、智、信に徹せよと教え

る。

しかしさらに、人の上に立つべき「君子」は、土を耕したり商いをするなどに手を汚してはならない、という思想があったようである。それゆえにか、儒教を公認の哲学とした江戸時代には、士農工商といって、武士を最上階に据えた。商人以下の階級、たとえば動物から品物を造る階級などは、まことに厳しく虐げられた。

また儒教とは思考の傾向が異なる道教では、仁（愛とか思いやり）というより無為自然を説く。これは商業の神様として鍾馗（しょうき様、赤ら顔の関羽）を拝む。これはシンガポールの華僑などに熱心に信仰されているが、やはり経済と離れた「竹林に憩う」といった「清貧」の生活を理想とする一面もある。ここからは経済成長は生まれまい。

しかし今は生まれているから、何かそこに伝統的な思想からの転轍（てんてつ）を行わせるカラクリがあるはずである。禁欲を徹底することが資本主義を生む、というように。

西洋に目を転じてみよう。キリスト教の開祖イエス青年は、大工の息子さんだったといわれるが、遂にキリストになられた。『聖書』によると、たとえば漁師たちに、職業を手放して私について来なさいと誘ったという。これも、出家のすすめであった。

「皆さん、明日、何を食うか、何を着るか、そのようなことを気にする必要はない。野の鳥たちを見なさい。明日のことは神が用意してくださっているではありませんか」と、こういう教えも述べておられる（マタイ、六・二五以下）。

古代ギリシャにも、同じような経済を離れる思想があった。プラトン先生の『理想国』（岩波文庫）などを見る

と、国家には三つの階級があって、哲人階級（政治を預かる人々）と補助者階級（軍人階級）、そして欲望階級（経済活動をになう階級）がいる。哲人は経済に手を汚してはならない。そして、欲望階級は、哲人の階級からの理性的指導に従うべきだと述べている。

これは、江戸時代の士農工商という階級論に通じるものがある。

どうも我々人類の社会には、洋の東西をとわず、時の古今を超えて、経済を警戒し、軽視し、はては賤視さえするという、抜き難い偏見があるのではないだろうか。

私は、宗教者や倫理道徳家の人々に対して、「経済学者になりなさい」などと野暮なことをば、決して言うつもりはない。しかしその人たちが、人間の救いを説くにおいて、経済の厳しい現実をよけて通るのは許せない、とは思う。

ましてや、経済を研究する人たち、会社を経営する人たち、品物を商う人たちは、ことごとく皆我欲にまみれた者たちだ、と言うに至っては、何をか言わんやである。

むかしドイツとイギリスでは、経済学は、人々が利己心を動機として経済活動を行うといった説明をするというので、「経済学は利己心の学問だ」というレッテルが貼られたこともあった。事実のうえで世の中には利己心の人が多いから、現実を解明するには、そのような人間像を基礎にモデルを造り、研究するほかないのに、そういうモデルはけしからん、という次第である。

それは、台風は被害をもたらすから困るが、台風はけしからんといって、台風を抜きにしたのでは、事実とし

ての日本近辺の気候や気象についての研究は成り立たない、というようなものである。

(二) 救いへの道としての経済

ただし、公平のため、例外もあることを付け加えておかねばならない。日本の仏教僧、鈴木正三師の学説である。鈴木師は、あらゆる職業（百姓）は、人に迷惑をかけないもので有る限り、それにまじめに精進すればすべて救いに至る道であるということを教えた（堀出一郎『鈴木正三』麗澤大学出版会）。

まことにこの学説は、当時の「福音」であったろう。激しい競争の中で商売し、あるいは厳しい自然環境の中で作物を育てるなど、経済を行う人々すべてにとって、心に解放と安心を与える指針であったろう。

日本には、この鈴木先生と通じ、経済を肯定する思想の流れが、根強く存在する。石田梅岩先生とか、二宮尊徳先生であり、明治維新以後には「論語と算盤」を唱えた渋沢栄一翁などである。

ともかく我々人間は、生き物であって、人形ではない。ロボットではない。我々は生きるためには、まず衣食住にわたって物質を必要とする。人体内部は水分（H_2O）およそ六割と、ほかにいろいろな物質（生命体を構成する物質）から成り立っている。身体のほかにも、着物や家、病院、学校、橋や道路などが必要であるが、それをつくる物質も必要である。この物質には、もちろんエネルギーも含まれる。

人間の生命活動には、この意味で、身体の内と外にわたる欠くことのできない物質獲得の活動がある。これが経済なのである。

しかも、これらすべての物質は、絶えず新陳代謝して壊れていくものだ。ゆえに我々は、それを毎日、毎月、

毎年、切れ目なく補給し続けねばならない。それは一回限りでなく、繰り返されるべき永続的、持続的な過程である。

これは、生命体である我々にとっての与えられた宿命である。

江戸末期の農村再建の卓越した指導者、二宮尊徳は、「人間は三日と食いだめすることはできないものだ」という趣旨のことを述べたといわれる。断食の行は別として、まさしくその通りなのである。断食でも水と空気という根本食物は摂取する。社会の水道や交通やエネルギーの供給など「ライフライン」では一時の切れ目も許されない。

経済の役目は、なにより我々人間の「生命」の「再生産」（繰り返しかつ中断のない生産）を、日々、持続的に物質的に支持することなのである。

孔子先生の『論語』には、「もし人民にひろく施しができて、多くの人が救えるならば、それは仁どころか、強いていえばもっと上の聖だね」という思想が披瀝されている。

訪ねてみれば、孔子先生の故郷、山東省は乾燥地帯。古代いかに経済が、政治の難しい課題であったことか、が推しはかられる。この思想をうけて、渋沢栄一翁は「米びつ論」を強調された。政治は、なにより国民の暮らしを安定せしめることが肝心だ、という立論である。これは今も変わるまい。

ただし現代では、以上だけでは済まない。経済は消費で終わらない。さらに廃棄物の処理が、経済の決定的な問題となる。昔私などが子供であったころには、廃棄物の処理はさして重視しなくともすませた。

私の子供時代には、村の人々のゴミ捨て場は大事なミミズ取りの場所であった。魚を釣るためとか、ウナギのカゴをつけるためなどに、大量のミミズが必要であった。しかし、ミミズを掘っていて、ゴミが汚いという意識はなかった。なぜなら、汚いゴミはなかったし、有毒のゴミはむろんなかったからである。野菜くずとか、畳の腐ったものとか、とにかく土に還（か）える物質ばかりであったからだ。

私は、いま故郷の村に帰っても、ゴミ捨て場を掘る気にはなれない。何が出てくるか、何が捨ててあるか、分かったものではないからである。過疎の進んだ年寄りばかりが住む村の生活といえども、化学による人工物質で汚染されているからである。

十九世紀の自由主義の旗手で、イギリスの偉大な思想家、ジョン・スチュアート・ミル先生は、その『経済学原理』（岩波文庫に翻訳あり）において、経済とは生産、流通、分配、消費の過程だといった。しかし廃棄物処理のことには言及していない。廃棄物とか、環境汚染が本格的に問題とされるようになるのは、二十世紀、『厚生経済学』のJ．C．ピグー教授あたりからである。

今日では、地球環境問題が深刻となり、我々はこの廃棄の過程を抜きにして、経済の意味を語ることはできなくなった。まずここにおいて、経済の意味が変質したのである。

㈢　経済は物欲主義だという偏見

ここで最初の課題に取り組もう。それは、経済というものに関する根強い偏見である。つまり、「経済は物質主義的な価値観に立つ営みだ」という偏見がそれである。もっとはっきりいえば、経済は利己心、それもガリガリ

の利己心、物欲に引っ張られた行為だという偏見である。経済は物質を扱うことである、そしてそれは即、物欲にかられた行為だ、というふうにつながっていく偏見である。

この種の偏見は、往々にして宗教家や、学校の教師とか、哲学者とか、道徳家とか、芸術家、政治家など、「生産の現場」を知らない人々によるものが多い。一から十まで土と、薪と、色素とを扱う陶芸家などには、まさかそんな偏見を抱いた人はおられないと思うが、しかしそれも分からない。案外、居られるかも知れない。自分の行っていることが、物質を扱うことであるということを、自覚しないこともあるからである。これは実におかしな見解だ。

例を挙げよう。

私は、日本の雪舟などの水墨画もだが、ターナーとか、ルノアールも大好きである。が、彼らのような画家でも、ロダンのような彫刻家でも、ベートーベンのような作曲家でも、事は同じ。扱う世界が紙と、油と、筆と、風景と、あるいは人物と、すべて物質の世界であることには、変わりはないからである。音の世界も、同じである。楽器という物質がその場に加わるだけである。

芸術もすべて、物質の加工作業である。美という価値を追求する物質加工職である。このように言うと、おかしいであろうか。間違いであろうか。皆さんはどうお考えであろうか。ここには、美という「情報」が現れているのである。情報のことはあとで考えよう。

ともかく、我々の生活世界、毎日の暮らしで、物質の重大な意味を自覚しない人たちほど、自分が他人の作った品物で生活しているのだ、ということを忘却していることが多い。そのくせに、庭園とか、茶器とか、建物とか、美食とか、絵だとか、金銭だとか、骨董（こっとう）だとか、何かとても物に執着し、それらを愛玩する人が居られるようだ。

もちろん、度を越した物欲にもとづく経済は、悪しき経済であり、否定されるべきだが、人間の生命と物質との間の切っても切れないつながりは、努々（ゆめゆめ）見過ごしてはなるまい。それは、我々にとって、直視しなければならない厳粛なる事実なのである。それなしには、人間の生命（いのち）は、絶対に維持できないのだから。

ただし以上のような偏見の色めがねを外したうえで、なおも無視できない問題がある。すなわち、経済というものを「物質をめぐる活動」に限定することの当否である。限定すると誤りとなるのだ。また、我々人間自身の肉体と精神の関係をどうみるかも問題となる。これらは後に、現代の経済文明と情報との関連を考察するところで検討してみよう。

現代における経済の変質ぶりは、物質をふまえつつも、物質を超えた見方に移るよう、我々に要求していることも事実なのである。それは情報革命の効果である。だから、情報革命と経済とのかかわりへと、考察を進めねばならない。

しかしその前に、検討しておくべきことがある。それは経済と人間関係とのかかわりである。

三　人間の相互依存と経済

(一)　交換と売り買い

子供のころの風土と生活と、そこからの学習は、人生にとっての基本となる物の考え方を作るらしい。人間の脳は一〇歳くらいまでに形成されるという説も、あながちウソではないだろう。今にして思えば、私の経済に関する基本観念もまた、さまざまな偏見も含めて、幼少のころに形成されたようだ。特に、私の場合、売り買いに関する見方が重要であった。

五木寛之さんは、前に紹介した『人生の目的』の中で、「意味が分からなくてもとにかくそれを暗記する、暗記したうえにそれが書けるようにする」ということが、あとで非常に大事なことになると述懐しておられる。

私はまた、曽野綾子さんの鋭い思想と言論、そして実践にはいつも感銘し、教わることが多いのだが、曽野さんもおなじような意味のことを、どこかで言っておられたと記憶する（『私を変えた聖書の言葉』講談社文庫、にはこのことの曽野さんご自身における証しが見えている。もっと最近、「観念」でなく自己体験を踏まえて、より「実験」的で成熟した思想に関しては、『戒老録』祥伝社、に参究すべきであろう。私もようやく歳を重ねて、これを読む資格が、物理的年齢だけとしては備わって来たようだ）。

人生のうんと若いころ、いまだ物心つかぬころに、心に汚れのつかぬころに、ともかく聖賢の書を読み、暗唱する。「よい言葉の箱」をいくつも心に仕入れておく。そして一歩一歩、人生の経験を積む毎に、一つ一つ悟った

意味を、その箱に入れて行く。

親というものは、小さい子供に、そのような聖人、賢者の言葉を繰り返し読んで聞かせる。自分も学び直すべきである。これが家庭教育、家庭での人づくりの、要諦の一つである。私は、これは人づくりという経済の出発であると思う。

例えば、祖父が読んで聞かせてくれていた「お経」が、いまの私には、とても役に立っている。

さて、私にも経済についての偏見が忍び込んでいたことをお話ししよう。それは売り買いに関する偏見であった。

まだ小学校のころだから、一九五〇年代であった。夕方、学校から家に帰る道すがら、私にとってある「不思議」な光景に出会った。それは、先生の一人が店で野菜を買っている光景であった。我々農家の者には、野菜を買うということは、あり得ないことであった。必要な野菜はすべて自分のうちの畑で作るというのが、当時の生活における常識（コモンのセンス、皆が共有する感じ方）であったからである。

「先生のところは貧乏なのだな、野菜がないのか、かわいそうだ」

とこう思ったことを、私ははっきりと記憶している。

売り買いという行為は、あのころの農村の毎日の生活においては、極めて稀（まれ）な行為であった。

漁村から、朝、市場に揚がったイワシを、浜のおばさんが背負って行商にくる。農家の玄関は戸は閉まってい

ても鍵（かぎ）はかかっていないから、おばさんはつるしてあるカゴにイワシを入れ、引き換えに、置いてあるお米をもって行く。これは「沈黙交易」といってよかろう。こういう物々交換的な売り買いを見て育ったものである。

子供ごころには、しかし、野菜などは当然、自分の家の畑で作るもの、と思っていたのである。①買うのは、自分の家に無いからだ、②無いのは貧乏なのだ、③貧乏はかわいそうだ、とこういう発想のつながりが、私の頭の中に出来あがったのであった。「無いのは貧乏なのだ」というのは、しかしあまりにも飛躍した判断ではあった。

山村では、わが家（や）の、そして多くの農家の、冬の仕事は「炭焼き」であった。山の中の炭窯（すみがま）で焼いた炭を、毎日三俵ずつ、背負って下り、道路のそばの小屋に入れておき、時々仲買人に買って行ってもらう。三俵は、力の強い大人でも、背中にしょって下るにはとても重たかった。一九五〇年代終わりころ、三俵で一千円くらい。

私もその手伝いを子供なりにしたものであったから、実は「売り買い」という行為は、まったく無縁なことではなかったのである。

なのに、「野菜は買ったりしないもの」というのが子供の私の「常識」であった。狭い経験からの見方であり、いわば一種の偏見だったわけである。体験からくる認識の制約とはおそろしいものだ、と反省している。

商店の家の子供の生活、町工場をやっている家の子供の生活、サラリーマンの家の子供の生活などは、その実感は、私には想像だにできない。そのような経験のおありの方に教えて頂きたいもの。

さて、人間にとっては、存在する物も行う事も、すべからく多次元的なものである。いろいろな側面を、多くの次元を持つといってもよい。一つのコップでも、上から視ると丸い円に見えるし、真横から見ると正方形か台形であり、斜めからだと円筒形である。我々の経済も、同様。いろいろな次元、いろいろな側面を示す。

これまでに取り上げて考察してきた経済とは、人間の生命の再生産とそれに必要な物質との関係の次元に、光を当てたときに浮かび上がる姿であった。この光の当て方は、人間の生命の再生産が目的で、それに物資が必要だというところに、手掛かりを求めたわけである。

しかし経済は、獲得される物の背後に繰り広げられる、人間関係の次元からも理解する必要がある。我々現代人は、一人で自給自足の生活を続けることはできない。だから経済においては、人間関係というものがどうしても顔を出してくるのである。この人間関係の次元からすると、経済とは、まず交換の領域、売り買い、市場の領域のことである。

私の尊敬する松下幸之助さん、その語録にいう、

「商売というものは単なる売り買いではなく賢明な奉仕であり、そこに良き心が通わなければならない」。

（松下幸之助『日々のことば』ＰＨＰ研究所、一〇六ページ）

さすがに松下さんは、経済がいかに人間関係そのものであるか、深い心の関係を作るべきか、を的確に言い当ててておられるのである。

(二) ロビンソン・クルーソーの島生活と経済

人間は、物質にせよ何にせよ、自分に必要なものをすべて自分一人で調達することはできない。かならず人さまの作った物をいただかねばならない。一人で操縦していたヨットが遭難し、一切の文明の利器を流され、絶海の孤島で一人で生活せざるを得ないこともあろう。そのときには、食うものから、雨露をしのぎ日を避ける住み家から、着るもの、そして必要ならばを道をつけることに至るまで、すべてゼロから自分で作らねばならない。

グワム島の林の中の穴に潜んで終戦後もしばらく降伏せず、出てこなかった横井正一さんは、ほとんど自給に等しい生活であったらしいが、それでも時には村に出て野菜などを「盗んで」（？）手に入れ（調達し）ていたという。何が毒が無くて食えるもの（edible）かは、野生動物が食べた形跡があるかどうか、により判断していたともいう。これは遭難記などでもよくいわれることである。

我々人類もその一員である動物が、本能として共通にもつ判断力に、横井さんは懸けた、そしてそれは間違いではなかった。生命には共通の根底というものがあるのだろうか。

こういうような、ある特定の限られた非常事態に陥った時には、やむを得ず自給自足に近いことを強制される。だが現代人の通常の生活では、個人の自給自足の暮らしは、まったく不可能である。集団の人間による自給自足、例えば一つの国の自給自足は不可能では無いが、個人ではまず不可能である。

すでに古代ギリシャのプラトン先生が述べたように、我々は不完全動物であり「欠陥動物」である。自分の暮

らしを一人で支えるような「完全性」は有しないのだ。他人の手になるものを、しかも一種類でなく多種類、手に入れなくてはならない。かわりに我々もまた他の人々に、我々の提供できるものを手渡さねばならない。さもなくば、人間関係は一時は成り立っても長くは続かないだろう。どのような人間関係がありうるかは、生態学（エコロジー）の見方を借りてのちに検討しよう。

皆さんは、ダニエル・デフォーさんの書いた『ロビンソン・クルーソー』を読まれたことがおありだと思う。私も、子供のころに絵本とか子供向けの物語り本で、幾度も読んだ覚えがある。それは、とても冒険心と好奇心をかき立てる筋書きであったことを想い出す

そんなことからだろうが、一人で近くの河川敷に行き、離れ島についた気分で自分なりに場所を定め、ちいさな小屋らしきものをこしらえ、カマドも作って食事をあつらえ、一人で孤島に来たつもりで生活をしてみる、という「冒険」をしたこともある。

うんと後年の話だが、あのロビンソン・クルーソーは、難破した船から斧などの道具類を持ち運んで来て使用した。そして、フライデー（金曜日に会ったからフライデーと呼ぶ）という青年を一人見つけて、垣根を作り、共同生活を営んだのである。幸いにして孤島でも、分業と協業が行われたのである。

そのときの斧などの道具は、ロビンソン・クルーソー自身が個人で製作したものではない。彼の母国の港を出

るとき、船会社が購入して船に積み込んで来たものであり、もともと母国の職人たちが作ったものである。ゆえに斧の背後には人間がいる。それを作った職人がいる。またそれを売ってくれた商人がいる。倉庫から船に運びこんだ荷役の人々がいる。一つの斧が、なんと多くの人々の手を、体を、そして心を、経ていることか。

ロビンソンが母船から引き取って来た品物の背後には人々がいる。関係している人々を数えあげて行くと、数十を下らない数の人々が彼の生活を支えてくれていることになる。その支えは、交換という人間関係の仕組みを通じて行われる。

我々の世の中とは、このような人間が相互依存する関係にほかならない。我々の人間関係の集まりである社会の維持は、どうしても分業と協業、相互依存に基づくことになる。相互依存の一つが交換であり、売り買いという交換である。我々は自分の提供するものと相手が提供するものとを交換し、あるいは売り買いするほかない。その交換が多人数の間へと発展すれば「市場」（market）というシステムができあがることになる。

経済というものは、それゆえ、市場での売買の活動であるといえるのである。市場での売買を通じて、我々人間の生命を維持するために必要な物質を獲得する活動が、経済なのである。

現代では、市場を否定する計画経済をねらったマルクス主義的な社会主義は破産した。だから、経済の一切は市場を通じて行えばよいとする市場原理主義が、世界中にますます拡大している。いわゆるグローバル市場化である。これが世界史の今日の段階に見受けられる動向である。

㈢ 貨幣と市場経済

しかしここで注意すべき重用点がある。この点を外しては現代経済は分からない。それは、市場とは、善き物と善き物との交換の関係が、物々交換でなく、貨幣を媒介とする間接の交換にまで発展したものである、ということである。つまり市場とは、貨幣を媒介として売りと買いとが行われるシステムなのである。それは単なる物々交換に止まらない。

物々交換と、貨幣を通じての売買との間には、はなはだ大きな距離がある。そこには「死の跳躍」(salto mortale)がある。貨幣を媒介とする市場での売り買いとなるには、物々交換は死ななければならないのである。

市場とは、物々交換ではなくて「貨幣経済」なのである。だから、売買になると「貨幣経済が経済である」ということになる。経済とは貨幣的活動だ、といわねばならないのである。

そこで、立ち止まって、貨幣の役割について、少々、考察を加えておきたい。

貨幣は、ある意味で万能の力を発揮する。それがあれば、貞操すらも買えるし、人の臓器も買えるし、はては人の命すらも買うことが行われる。古代から行われたらしいが、奴隷売買がそれであった。貨幣が登場すると、我々は「何を、交換ではなく、売り買いしてよいか」という倫理道徳問題に突き当たる。

この問題は、交換の場合でもある程度は出てくるけれども、貨幣が媒介になると格段に深刻な問題となる。

例えばアメリカなどは、南北戦争の終わる時まで、奴隷売買を続けていた。アメリカの奴隷制度は、一八六三

年「奴隷解放宣言」でやっと終わりがつげられた。日本でいえばなんと明治維新の直前である。日本もそれまで士農工商という階級制度があり、身分差別、人間差別が行われた。が、人間を商品とし、「呼吸する道具」という奴隷を認める制度までは存在しなかった。

この事実は、近代以前の古代的要素を、近代国家を建前とするアメリカがつい先頃まで保存していたということを意味する。これが「天は人のうえに人を造らず」(造物主は人を平等に造られた)という趣旨を込めた「独立宣言」を発した国での物語である。

ちょっと横道にそれるが、一体にアメリカという国は、奇妙キテレツな性質をまじえた国である。アメリカには、奴隷制の他にもうひとつ、まったくおかしな要素が残っている。残っているというよりは「積極的に保持されている」といったほうがより正確である。憲法にはっきりと書いてあるからである。ほかでもない、銃の保持と売買がそれである。

これも憲法に、自己の生命、身体、自由そして財産は自分で護るべし、その手段として銃を保持し使用する、という自由な判断と権利を各市民に認める、との趣旨を書いているからである。このような自己防衛の権利を「自力救済権」という。

日本でも、戦国時代までは、この原理を各人は自然にもっていたといえる。農民も、行商人も、自分で武装し自分の身を護った。自分で護らないと、他のだれも護っては呉れなかった。さらに、戦(いくさ)のどさくさに乗じては、

他の人間を攻撃することも自由であった。

例えば、関が原の戦いの後、西軍側の敗軍の将、石田三成は、琵琶湖の北の山間で捕らえられた。彼を捕らえたのは田中吉政という人物とその配下であった。吉政の母は、かの慶福門院、鉄砲鍛冶で有名な滋賀長浜の国友与左衛門という人物の姉。吉政自身は琵琶湖畔の虎姫という所に生まれた。

三成捕縛の功で家康に認められ、ついには九州は柳川の三十三万石の大名となった（湯次行孝『国友鉄砲の歴史』淡海文庫五、サンライズ出版）。

そのころは、低い身分の職業の者でも、武器を使って戦い、大名にも成れたのである。自力救済権の時代なればこそである。

日本では、こうした自力救済制度は、江戸幕府の成立とともに、廃止されたといってよい。代わって、「営業の自由」が導入され、自力救済が取引の世界で求められるようになったのである。自由経済の到来であった。

自力救済の制度を根本的に保持するアメリカは、銃器保有と売買を基本的人権として認めるから、銃による殺人は、毎年、交通事故死に匹敵する。あるいはそれ以上の死亡事故を引き起こしているところもある。この点では、日本はアメリカよりも、進歩しているわけである。アメリカは病んでいるどころか、歴史に後れているのだ。

だが、経済時代の今では、何を売り買いしてよいかという価値観として、「売買の基準」は重大な問題となる。

㈣ 貨幣・市場経済への憧れ、妬みそして蔑視

ここには、興味深い事実が浮かび上がる。すなわち、貨幣や市場は汚いもの、けがわらしいもの、という感情

が生まれることである。どの文化にも、お金に関する戒めや嘆きは数多い。

いわく、

「世の中に、金で動かぬものはなし」

「金で片がつけられるなどあってはならない」

「なんでも金に換算するとは汚い」

「万事、金の世の中となり、温かい心が通わなくなった」

「票を金で買うなんてもってのほかだ」

「あいつは守銭奴だ」

「金を愛することは、もろもろの悪しき事の根（ねっこ）なり」

「地獄の沙汰も金次第」

「金の切れ目が縁の切れ目」

「金持ちの貧乏人、貧乏人の金持ち」

「金を貸せば友を失う」

などと挙げて行けばきりがない（『ことわざ・名言辞典』創元社、等による）。

これは市場や貨幣経済への誤解と偏見の始まりである。その背後には、万能の貨幣を手に入れたいという憧れと、出来ない人の妬みが潜む。もちろん、もっともな批判の場合もある。これらの批判に共通することは、金で売り買いすることがふさわしくないものがあるぞ、ということであり、至極当然の警告なのである。

今の世の中には、「市場経済にすれば何でも片付く」という一方の極の偏見があるから、市場経済には限度があるという批判は、我々の社会にバランスを取り戻す思考として重視しなくてはならない。

従来、貨幣経済、市場経済の批判は、マルクス主義の陣営から最も体系的に行われてきた。それには、まことに鋭いものがあった。マルクス主義は、市場経済、貨幣経済を廃棄することを理想とした。一九二〇年ころからのソ連社会主義の七〇年間の実験は、その理想を追うものだった。しかしそれは徒労の試みであった。だが、案外、マルクス主義を毛嫌いする人々でも、貨幣や市場への反感だけは、共有することが多い。

しかし、人によっては、そこから一足飛びに、市場経済の一切への批判という偏見へと傾くきらいがある。経済は汚い活動であるというさげすみが聞かれることになる。すべからく「商人はえげつない」などという差別的批評も同様の部類である。実際そういうえげつない商人がいたことも否定はできない。

皆さんの周辺で、ひとつ店に入って聞いてみられるとよい。並べてある商品のどれかを指して、「その仕入れ値はいくらですか」と聞いても、大方は言を左右にされ、あいまいな答えしか返って来ないはずである。「なんと無礼な質問をする人か」と怪訝（けげん）な顔をされるのが落ちであろう。通常では、原価の情報はプライバシーに属し非公開の情報なのである。

工場の入り口には、「情報を盗むもの入るべからず」という目に見えぬ禁令が掲げてある。最近では、農業などでも、「ここからカメラはお断り」というところが多くなった。世は「せちがらい」ものへと変わっていくのか。

ビジネスにおいては、「アカウンタビリティ」(accountability　説明責任、説明義務)と「透明性」(scrutability)が求められる、といわれる。アカウンタビリティとは、自分がなぜそのように行為するかの理由とか、売る品物の内実を、よく説明するという義務である。透明性とは、行動のルール、物事の内部や行動の状況が、外部の他人に理解できることである。

しかし、まさか原価を教えてはくれまい。現金・正札・正直な商売を標榜（ひょうぼう）しガイドラインとする、と公表していても、「原価、それは私の秘密です」と言われるであろう。

だからといって、商人と商業への批判では、その多くが感情的で過剰な偏見であるといわねばならない。正しい商業は必要である。神戸の地震で商店が破壊されて、老人子供など、人々がどれだけ不便を味わったことか。

とまれ、プライバシーとは何か。これは永遠の問いなのであろうか。

たしかに、貨幣経済も、市場経済も、したがって価格という物差しも、人間の社会にとっては、ある限度においては不可欠のものである。それらは、社会というものが小人数の交わりでなくなり、不特定多数の人々の間でのものとなるにつれて、働きの成果の融通や意志伝達(コミュニケーション)を円滑にするために不可欠のメディア（手段）となる。またそこでの意志表現のサイン（記号）とかシンボル（象徴）となる。言葉が不可欠であるのと、それは軌を一にする。

だから、感情的な貨幣批判は、この必然性への十分な認識を妨げる。社会主義の失敗のゆえんは、なにより貨幣と市場の役割を過小評価し過ぎた所にあると言えるだろう。

しかしそれにしても、貨幣経済と市場経済への批判は、「むべなるかな」という点もある。

人類の世の中には、最も役立つものが、有能であるがゆえに価値を最も低く評価され、貶（け）なされるという現象が起こる。

これは我々の政治にも見られる。政治（家）は、なんでもできると思われるからこそ、最も卑しいうさん臭いものとされるではないか。その点、政治家は貨幣と同じ位置に立たされるのである。そして、政府と官僚が、かつて万能であったがゆえに、今はうさん臭いものとして、疑われ、嫌われる時代である。

しかし私は、これは警戒すべき潮流であると、逆に世論のうさん臭さを疑う。世論はいつも中正であるとは限らない。いとも簡単にマスコミに操られるし、世論の判断なるものは、市場の判断と同じく、短期的であり、投機的なのである。

一九八五年から一九九〇年ころまでの「バブル経済」の時に、我々一般大衆までもが、株投機に没頭し、土地投機に走り、ゴルフ会員権に殺到し、節税と称してマンション投機に群がり、書画骨董買いに心を動かしたではないか。自業自得というものを、今、日本人は噛み締めるべき時なのだろう。

現代ではしかし、貨幣と市場が万能である、というわけにはいかないのである。貨幣的、市場的でない社会システムが、かえって重要となりつつある時代でもある。世はあげてグローバル時代、市場経済時代、規制緩和の一大合唱である。確かにそれには十分な理由があるが、その限界も冷静に見通しておかねばならないと思う。グ

ローバルに対し、グローカル（グローバル＋ローカル）といわれるゆえんである（千葉大、村山元英教授の造語ともいわれる）。

市場は万能ではない。市場の限界を補完する非市場的システムが、人類の社会には不可欠なのである。

経済はしかし、市場での貨幣を媒介とした交換であるという意味を、確かに有するのである。いたずらな貨幣批判、市場批判は、決して有効ではない。貨幣は人類の歴史とともに古いという事実の意味を、我々は無視してはなるまい。

そこでの我々の課題は、市場での売り買いを、いかにして正義にもとらず公正に行うかにある。我々一人一人の使命とは、このことを深く考え、積極的に実行していくことにあるのではないか。

四　人間の、生命、目的及び手段

㈠　合理主義の思考と行動

作品には、作者の意図を越える「いのち」が通っている。小説には、まずその作者が意図し読者に伝えたいメッセージが込められているが、またしかし作者の意図しない重要な意味が伴っているものである。作者が作品を書くのではない。逆に、「いのち」が、自己を露（あらわ）すために、作品を通じて作者を使役するのではないか。

空想であれ事実に近いものであれ、作品が人間の生活の――心理と行動の――描写であるかぎりそうなる。人間の生活には、そしてその描写である作品には、いずれの人々の生活にも通じるメッセージと意味とが含まれざ

るを得ない。作品には作家の思いもかけなかった顔と心が備わっており血が通っている。

さきに取り上げた『ロビンソン・クルーソー』の続きを考えてみよう。あの小説の中に、ロビンソン・クルーソー「物語」というものがあるのである。それは「経済物語」である。その物語とは、人間の「合理的思考」と、計画と計画の遂行と、その結果に対する満足の味わい、あるいは失敗の後悔、という一連のつながりのことである。これは、今でも、いな今こそ一層、重要な意味を我々の人生に対して与えてくれるのである。

船が難破し、孤島に漂着して、そこでどうにかして生きのびねばならない、という「せっぱつまった状況」におかれたロビンソン。

人生とは、思いもかけないこととの出会いである。しかし、その偶然の予期しない出会いを、どのように受け止め、落ち着きを取り戻し、いかにして次の段階の生活を組立てて行くか、これが人生において肝心である。

偶然とは「異なる必然の系列の出会い」である（九鬼周造『偶然性の問題』岩波書店）。その個々の偶然の出来事に、各自が自分で意味を盛り込むのである。人生には、無意味の物事は存在しない。

ロビンソンは、まず自分のいのちを脅（おびや）かす敵がいないかどうかを確かめる。これは自衛の問題である。次に、飲み水を含めて、いのちを繋（つな）ぐには食料を確保しなければならない。それがどうにかできると、今度は周辺の探索に向かう。自分の生活のためのテリトリーつまり空間、領域、領土の確認である。テリトリーが確認できると、少し落ち着いて、さてこれからどのように生活を組み立てて行くか、という問題に改めて

取り組むことになる。

歴史上、人類の争いでは、この空間争奪の争いが、ほとんどの争いの基本的原因であった。「国取り物語り」がそれである。今日では、企業の間の市場の奪い合い、注文取り争い、売上争いである。

次に、沖合に座礁している船から、利用できるものを有りったけ運んでくる。露命をつなぐための生活手段の確保である。そしてこれは、自分の母国での生活の継承なのである。

船から物を取ってくるということは、母国の文明と文化の歴史を、先人の恵みを、受け継ぐことなのである。孤島の生活は、決してゼロから始まるのではない。

こうして、初めに、頭の中に生活のイメージが、一つひとつの仕事のノウハウが、設定されている。それはロビンソンの頭脳と身体に記憶された母国の文化の一端である。そのノウハウを孤島での現実の生活構築に、一歩一歩、生かして行くのである。実現して行くのである。その様子を描写するのが、この小説の筋だてである。

空間の問題が片付き、食うもの、住まいが確保できてホッとすると、次に生活の設計は「時間」を刻むことに移る。我々人間は各自の文化に応じて、特有の時間の刻み方をする。

ロビンソンは、難破した日からどのくらい時間が経つかを記録する。これは、祖国を出てからの時間の流れを継続することを意味するのである。時間の記録を止めると、郷里の祖国での時間から、島での生活時間が切断される。人生の時間が中断する。時の刻み方も、文化の一つなのである。

さてしかし、この筋の中に、我々は、何を読み取るべきか、読み取れるか。人により、各人毎に、異なるであろうが、おそらく共通していることは、孤島という空間の恵み(制約)、二四時間という時間が恵まれているということ（しかし制約でもある)、食物の自生状況（環境という舞台)、こうした一連の物事をうまく組み合わせ組み立てることである。

その組み立ての目的は何より自己の生命を維持するということにある。この究極目的に従い、手にした資源(ノウハウを含めたもの）を最適に使って、目的を実現するということである。

以上を我々は「合理的行動」の論理と呼ぶことができる。合理とは、宇宙の真理への適合という意味である。もちろん、この合理的思考と行動との底に、神仏などへの信仰――という形で自覚される合理――があることもあろう。ロビンソン・クルーソーは、多分、ヨーロッパの国から来たのだからキリスト教の信仰をもっていたであろう。キリスト教でなくとも他の宗教でももちろんよい。

それによって、とにかく絶海の孤島に突然ほうり出されたとき、落ち着いて辺りを見回し、孤独と恐怖に潰(つぶ)されず、与えられた新しい環境で自己の生命を生き延びさせるというエネルギーを、根底で支える信念が与えられるのである。人間は弱き存在。孤独と苦難を乗り切るには、信仰は強い支えとなる。

このように、もともと、合理とは、神仏の心、自然の摂理などに、人間が心を合致させることを意味していた。まず始めに「天命に従って曲(つぶさ)に人事を尽くす」（広池千九郎)、そしてその次に、よく教えられるように「人事を尽くして天命を待つ」という。合理とは、この二段構えの精神からなるものである。人事を尽くすと言っても、

自分勝手ではうまく行かない。用心深く、天命、法則に従うのでなければならない（広池千九郎『道徳科学の論文』⑨、四〇五ページ、モラロジー研究所)。

実はこれは、我々みんなが多少とも試みていることである。だれでも、車を運転するときは、事故を起こさぬようにと、車の法則に従い交通ルールを守り、そして誠心誠意、運転に打ち込むではないか。

小さな人間の無明、エゴ、自己中心性に導かれた思考と行動では、いくら首尾一貫していても合理的とは言わない。もちろん我々の理性は有限であり、「限定された理性」（ハーバート・サイモンの説）という理論もある（最も包括的な研究は高巌『サイモン研究』文真堂、を見られたい)。我々は、ともすると合理主義への批判に安易に組しがちであるけれども、そのまえによく合理主義の真意をくみ取るべきではないか。性急な合理主義批判をしてはいけない。我々は、努々(ゆめゆめ)、ここのところを取り違えてはならない。

こうして、経済とは、以上にみたように、①物質の調達と、②市場と貨幣経済ということのほかに、さらに③人間としての目的を実現するために必要な手段を調達し、要所要所にうまく配分して、目的を実現する営みでもある。経済とは、目的選択と合理的な手段配分の営みである。これが「合理的行動の体系」ということであり、経済の第三の意味である。ロビンソンの「物語」とは、このことを言うのであった。

(二) 合理性に含まれる内部矛盾

しかし、さらに解決すべき課題が出てくる。簡単に合理的な行動といっても、それは容易に実現できるもので

はない。ここから、実際の経済問題は始まるのである。

まず、事に当たっては、目的にも複数の小目的があり、お互いに競合する。あちら立てればこちら立たずである。それら目的の全体としては「自分の生命を維持すること」というくくりかたはできる。しかし具体的な場面では、目的にはいろいろ異なるものがあり、互いに競合しあうことにならざるをえない。

この間の事情を、「ロビンソン・クルーソー物語」にもどって考えてみたい。

人間が生きて行くには、確保した空間をどのような目的に使うか、という目的の優先順位を決定しなければならない。それに応じて、空間という資源の配分が行われる。

我々は、個人として一定面積の土地に家を建てるにさいして、建物の容積をどれだけにするか、玄関の大きさ、居間の大きさ、台所、風呂場、便所、寝室、床の間、いろいろと配分を工夫する。

時間についても、優先順位を決めねばならない。そしてそれに応じて、時間という資源も配分する。仕事をする時間、眠る時間、外に出て遊ぶ時間、コンピュータゲームを楽しむ時間、読書の時間など、一日の二四時間という時間資源の配分にも気を使う。

時間という資源は、しかも、人を待ってはくれない。「今ここ」の時間は、瞬間に消えてなくなる。戻っては来ない。リサイクルできない。

昔から言う、

歳月人を待たず。光陰矢のごとし。

少年老い易く、学成り難し。

知恵の習得は日暮れてなお道遠し。

収入の配分にも苦労する。収入が無限であれば苦労はないが、収入には限りがあるから何にどれだけ使うかは、知恵の働かせどころである。

私は、こと本の購入には目がないから、財布にお札が入っているとすぐ目一杯使う癖がある。特にクレジットカードは、外国に出掛けるときは仕方がないけれども、日本ではまず使わない。使うと、使い過ぎること確実だからである。カードは自己破産の元である。

目的と時間配分について、一見経済と関係ないかのように見える芸術に例をとろう。作曲家が音楽を作曲する場合でも、時間を使うし、現代であればエレクトロニクスを利用した楽器やシンセサイザーなどを使うだろう。なにより自分の身体という資本を投入する。疲れるとコーヒーなどを飲むかもしれない。作曲という目的にとって、すべてそれらは手段であり資源である。

さらに、作曲という目的は一つだが、二十四時間、ずっと作曲しつづけるわけではない。作曲家の人生にもいろいろと実現したい二次、三次の目的があろう。食事もするだろうし、本も読みたい、趣味にも時間と身体とお金を使いたい。健康のためにアエロビクスやスポーツジムに通うかもしれない。ドライブや釣りに行くかもしれない。人生において、これらの目的は競合する可能性があるから、選択し優先順位をつけなければならない。一

見無縁であるかのように見えても、作曲家の生活もまた経済の意味を含むのである。芸術も芸術家の人生も、経済を秘めているのである。経済は、あらゆる職業に通じ、すべての人生にかぶさってくるものである。経済とは、選択の問題でもある。

目的の次に、手段にも、いろいろな種類のものがあり、しかもすべて限りがある、つまり有限である。かつ、同じ手段が、いろいろな目的にも使える。

ロビンソンの孤島でも、食物はとても限られていただろう。まれに、バナナとかヤシの実がたわわになっている――探検、冒険物語りは、北半球の欧米帝国主義のはしりだから、多くは南洋の海と島と人が舞台になった。無人島と思ったのに人が住んでいて畑がある。それで先住民と仲よくなれば食うには困らない。そういうような場合もあろう。そのときは、神の恵みというべきか、食物の有限性からは解放される。

大東亜戦争の当時のこと。知人の中村義彦という方から聞いたのであるが、母一人子一人の家から出征し、二〇歳台初めの若い身そらで、現在のインドネシアのどこかオーストラリアに近い方面の島に駐留したときのこと。食うものはといえば、くる日もくる日も、ドラム缶にあふれるばかりに漁(と)ってくる「なまこ」であったという。見知らぬ戦地では、そういうことも日常茶飯(さはん)。また、いわゆる南京問題で、日本軍が現地住民の家庭から糧食を略奪したか、国際法にしたがって正当な方法で調達したのか、が論争になっているそうだ。

これらは、戦時における軍隊の経済問題である。軍隊も食わねばならず、基本的経済問題から免れない。いな、

戦争末期には、多数の兵の自滅は、殺傷によるよりも、飢餓と病気によるところが大きかったという。

ちなみに、近年、日本列島でも、縄文時代の遺跡が、各地で発掘される。それは観光目当ての村起こしや町起こしには好ましいことだろう。がしかし逆に言うと、我々日本人が、いよいよこの日本列島を、あちらもこちらも、どこもかしこも、やたらと掘りつくし始めたことを、それは示すのではないか。都市化と住宅の開発のために、日本列島を食い破り、縄文人の静かな長い眠りを強制的に掘り起こしてしまうことではないのか。

ともかく、縄文式の遺跡は、自然の食物の豊富な所によく発見される。

私の郷里は島根県だが、島根県といっても大國主の命(みこと)の出雲地方でなく、柿本人万麿が生まれたとか、亡くなった、という伝説のある石見地方。森鷗外の故郷、津和野の近くであるが、匹見(ひきみ)という山奥に、縄文時代の遺跡がうんと出てくる。土地の人の話によると、そこは山野の木の実とか、山菜、動物が豊富であり、川の魚も多いという豊かな山間部である。そういうところに、縄文遺跡があるという。

ともかく、このような縄文人もそうであったろうが、ロビンソン・クーソーも、そして戦地の兵隊さんも、我々も、まず競合する目的に優先順位をつけねばならない。ここに、各人の価値判断が働くことになる。そして目的の選択と優先順位が決まったならば、次に限りある手段をそれぞれの目的に割り振らねばならない。手段を資源というならば、結局、経済とは合理的な資源配分の事だともいえる。

目的と手段という観点から人間の行動をみれば、さきに述べた物質をめぐる活動、交換という活動の視点だけ

ではなくなる。競合する複数目的を実現する行動、なかでも有限の資源の効率的な配分という、第三の視点が提出されることになる。

㈢ 技術と経済の違い

ところが、効率ということについては、とんでもない誤解と批判が横行していると思う。しかもそれが、経済学の専門家や評論家にも、しばしば見受けられるのである。

古くから、「節約は美徳である」とか、反対に「消費は美徳である」という。それは、一定の手段や資源の節約か浪費かを念頭においている。その中で、今日では、「効率一点張りの経済時代はもう終わりだ」という批判がよく聞かれる。それは一応は正しいように聞こえる。

効率とは、目的にたいする手段の関係をあらわす。一方では、一定の目的を実現するための手段をできるだけ節約すること、あるいは他方、一定の手段から実現される目的を最大化することを意味する。

この効率主義への批判は、なるほど妥当に聞こえるが、批判だけでは困る。代わりの案を示すべきである。効率と聞いただけで「反人間的だ」と感情的になり、心を背ける御仁がいるように、根深い偏見と誤解とが広がっている。その誤解と偏見を解くには、目的と手段の関係には、二つの異なるグループがあることに注目しなければならないのである。

一つは「技術」である。技術というものは、目的が一つで、手段が一つあるいは複数ある場合の問題である。これが我々が技術と呼ぶものの本質である。

ある一つの技術とは、何かある単一の与えられた目的を、いかに能率よく実現するかにかかわるものだ。複数の競合する目的の間の選択というものはない。もっぱら、一つの目的の下での手段の選択と節約、つまり資源の最適利用だけが課題なのである。

例えば、私は若いころ、西日本の中国地方で、秋口にやってくる台風を避けるために、収穫時期の早い稲の品種を導入するという目的を実現するにはどうすればよいか、懸命に実験したことがある。

それには、稲も植物であるから、植物の実りに必要な「積算温度」というものを知り、できるだけ積算温度の小さい品種を導入すればよい。

とすると、北国の稲は積算温度が小さいので、それらの中から品種を探せばよい。結局、青森県から藤坂（ふじさか）五号、北海道から金南風（きんまぜ）という品種を導入して成功したことがある。目的はただ一つ、いかにして台風を避け、多収穫をあげるかということであったわけである。

普通、技術の善し悪しは、この与えられた一つの目的をいかに資源を節約し費用をかけないで実現するかにより測る。そして現在は、これに加えて、環境汚染の程度が少ないことを求める。

ところが、これに対し「経済」では、複数の目的の間の選択というものが加わる。環境汚染の程度を減らすべきことは技術と同じであるが、目的が複数となる。

収穫量は上げたい。しかし、費用を節約して、西瓜（スイカ）などの果物野菜をつくり、また蜜柑（ミカン）も作りたい。また、ボランティアとして地域の世話をやっているので、時間の余裕もほしい。これが人生である。作物をたくさん作っ

て収入を上げるという目的と、時間を節約してボランティアにも打ち込みたいという目的とは、競り合う。どこかで折り合いをつけねばならない。これが農家の経済問題となる。

こういう異なる目的を同時に実現する努力をし、全体として利益を上げねばならない。それは、どんな仕事でも同じである。

製品を作って利を得るのが仕事であった松下幸之助さんは、正直にいわれる。

「大阪商人は利にさといという。しかし商売人が利にうとかったら、武士が剣術を知らないのと同じことであろう。」（『松下幸之助日々のことば』ＰＨＰ研究所、二五五ページ）

ただし、念のために記しておくと、松下さんの「水道哲学」つまり水道から水が出るように豊かな消費物資を生産し供給するという若い頃の理念は、今日では修正される。環境との調和が盛り込まれる。地球環境問題が起きたからである。これにより、効率の考え方が根本的に変わってくる。

ともかく、我々の生命活動では、異なる目的をいろいろな程度に応じて同時に実現しなければならない。人間のあらゆる生命活動は、このような目的手段の関係を必ず含む。いいかえると、どんな種類のであれ、人間の活動はすべて、技術の意味と経済の意味とをもつということである。

このように二つの種類があるが、目的手段の関係を離れた活動は、われわれの生活にはありえないのである。

㈣　私経済から社会経済へ

ところが、問題はもっと複雑となる。「社会経済」の登場である。これまで見て来たのは、ある一人の人における目的と手段の関係であった。

しかし、我々の社会は、一人のメンバーだけではなく、複数のメンバーからなる集団である。そこで注目しなければならないのは、経済と社会の関係である。

目的の選択を、個人の生活や個々の会社組織においてのみ考えれば、それは自己の目的選択という限られた範囲での私（わたし）的な問題である。しかし、複数の人間や会社などが構成する社会となると、目的の選択も、そして手段の選択も、社会の問題となる。

毎年、国家の場合でも予算審議が最大の政治課題となるのは、予算という裏付けなしに政府の行動は成り立たないからであるが、なぜそこで論争が起きるか。予算をほしがる利害対立グループが背後に存在し、それが予算案に表現される目的（利害）の優先順位を争うからである。だから国会に所属する委員会で、もっとも重要なのは予算委員会だという。私は、終戦（一九四五年）の御前会議のときに枢密院の書記官長をなさった諸橋襄（のぼる）という偉い先生に、憲法を教わった。先生は、予算委員会がいかに重要か、事実をあげて説明されたものである。

だから、経済は社会（ここでは国家）と不可分のものなのである。一国の経済が「社会経済」とならざるを得ないわけがここにある。

そして、社会経済には二つの種類がある。一つは「市場経済」であり、もう一つは「非市場経済」である。

第一の市場経済は、すでに述べたが、世間の各個人が、あるいは企業などの個々の経済主体が、貨幣を媒介に

して売り買いを行い、無数の売り買いの中からひとりでに結果が出るようにした経済である。これを「自然的自由のシステム」という。ふつうここでは、企業であれば利潤を目的とする。市場経済では、目的と手段の選択は、政治問題とはならない。一人一人の個人や企業に、目的と手段の選択が任されているからである。

他方、第二の非市場経済には、さらに二つのものがある。

まず、政府とか地方自治体の行う「行政経済」（公共経済）がある。これは目的と手段の配分に関して、政治問題となる。目的と手段配分の大枠は、選挙を通じて選ばれた議員が議会で決定する。それに基づいて、行政にかかわる公務員が仕事をする。

国家とその行政経済には、国家主権の発動として、税金の徴収、貨幣の発行とコントロールがあり、それにより財政を運営する。

現在では、中央銀行が紙幣（中央銀行券）を発行し、それが一国の通貨の大部分を占める。

ちなみに、私はこれは国家主権の侵害であると見ている。国家主権の回復を図り、グローバル時代の無国籍化する経済において、通貨投機を阻止し危機管理のできる通貨製作能力を、国家が保持すべきである。国家は、グローバル経済の中で、そう簡単に解体してはならないものなのである。いな、かえってその意味が重要になるとさえいえるのである。

次に、民間のボランティアが行う取引がある。利潤目的でない、市場経済でない取引である。これを「ボラン

ティア経済」と名付けよう。もちろんこれは、利潤を目的としないから、ＮＰＯ（非営利の組織）の経済である。この領域はますます拡大するであろう。この点には、最後にもう一度立ち返って議論してみたい。

五　情報革命、経済及び人間

㈠　情報を食べる人間

最近は、企業ばかりか、学生諸君もインターネットづいている。しかし、時折、困った現象も見受けられる。何かのテーマについて「調べてきなさい」とこちらがいうと、喜んで帰って行く。そしてたくさんのコピーを作ってくる。発表しなさいというと、それをひたすら読む。読むだけ。語句などの意味を質問すると、「分からない」という。何を調べたのかを聞いても、自分では内容が分かってはいない。

もっと困るのは、同じテーマにおびただしい記事がいろいろな人から発信されており、どれが信頼できるか、読む側が自分で判断をしなくてはならないのに、それが容易ではないことだ。学生諸君の力量では、簡単にはその判断ができない。

ただ、印字の機械から、印刷された記事を引きおろして読むだけ、ということになる。それでは、自分には正誤の分からない印刷文の洪水に流されるということになる。水道の蛇口をひねって、水を出しっぱなしにするようなものである。我々は、当惑せざるを得ない。

このとき、情報は意味である。意味が分からないと情報ではない。

また、携帯電話にどれくらいお金を使うか、いまどきの学生諸君に聞いてみると、大体、一月にして一万円近いという答えが返ってくる。留学生で、国際電話を入れるから、もっと多い金額を払う、と言った学生もいた。たかが電話というなかれ。

一方、学生で繁盛していた駅近くのカラオケ店に聞くと、携帯（ケイタイ）の普及につれて「大学生の来店がめっきり減りました」とぼやいている。経済を目的と手段との関係からとらえると、大学生の目的に変化が起きている。いや目的はそんなに変化しないとしても、手段が変化した、したがって支出の仕方が変わった、ということになろうか。大学生が本を読まなくなったと言われ始めて久しいが、このぶんだと本の購入もますます少なくなっているにちがいない。移動体（モバイル）通信革命は、ひょんなところに影響しているわけだ。

「ただの昼飯はない。」(There is no free lunch.)

「ただの情報もない。」(There is no free information.)

我々が一口に経済と考えるものには、三つの側面が考えられた。この基本的な構造自体は、古くからあり、そして二十一世紀になっても何時になっても、変化しないであろう。しかし、人類の活動が進展し、特に科学技術が発展するとともに、

①経済の物質的な理解

②交換的及び市場的な理解

③目的・手段的な理解

にもすべて変化が起きる。経済は物質にかかわるだけでもなくなり、市場的なものだけでもなくなり、したがってまた、目的・手段の関連も変化していくのである。こうしたいま進行中の変化は、情報革命と密接なかかわりがある。

経済は、物質にかかわり、価値の低い活動だという偏見があることは、すでに触れた。その偏見がますます通用しなくなっているのである。物質と情報とが合体して来ているのである。経済は、物質のみにかかわるものではなく、情報の次元を持つことが理解されねばならない。

情報革命により、情報の役割が拡大し、情報経済が決定的な意味をもつようになった。こうなると、経済は物質的なものという理解は、事実の半面しかとらえていないことになる。したがって経済活動は物質主義に犯されているという批判は、もはや情報経済の面にとっては的外れなのである。

こうして、いったん情報という存在を視野に入れると、従来の物の見方は一大変化を来す。そもそも宇宙観が変わるからである。

宇宙は物質と情報とからなり、一切の存在は物質と情報という二つの次元を持っていることになる。情報という概念は、物質、エネルギーに次ぐ「第三の普遍概念」となった。

情報が現れたことにより、我々は、みずからが住むこの宇宙、社会、経済など、一切の物事を統一的に理解し直すことになった。また、情報を導入することで、生命というものの理解も著しく進んだ。

だから、経済の意味が変質しないわけには行かない。遺伝子ビジネスはその現れである。知識も心も商売にな

る時代である。労働の意味も転換しつつあって、古くからの肉体労働と精神労働の区別もなくなってきている。

(二) 情報とは何か

では一体、情報とは何物だろうか。私は早くから、古代ギリシャ哲学にいう「フォルム」(形)と「マテリエ」(素材)という概念を使って、情報とは以下のようにいろいろな意味をもつと考えて来た。このギリシャ哲学の概念を教えていただいたのは、恩師の難波田春夫先生である。もう一九六〇年代初、三〇年以上も前のことであった。これを説明しよう。

マルクスは、神を否定して、情報革命の直前までの「古い科学時代」の哲学を徹底した。それがかれの「唯物論」(マテリアリズム)である(難波田春夫『スミス ヘーゲルマルクス』講談社学術文庫など)。「物質自体に法則がある」というのである。その核心はこういうことであった。

例えば、水とか、空気などの物質のように、存在するものは、それ自体が自己自身の法則をもつ。神とかリアリティなどといったものから、つまり存在の外から、存在の運動を起こす作用がやってくるのではない、と。

おなじく、人間社会は、神といったものが動かしているのではない。社会それ自体が運動能力をもち、自己運動を起こして行く。これをマテリエ(素材)そのものが自己運動能力をもつという意味で、マルクスは「マテリアリズム」(素材主義)と言ったのである。マテリエの外から形を与える力がやってくるのではない、と。

この考えを当てはめると、存在するものは、自己自身(マテリエ)において、形(パターン、フォルム)をつ

くるということになるのである。我々も普通はこのように考えているであろう。その意味で、現代人の多くは「マテリアリスト」(素材主義者)なのである。

フォルムを自己(マテリエ)自身において作るかどうかはともかく、マテリエとフォルムを考えるということが、物質と情報の理解に有効なのである。(なお、専門的な話になるが、吉田民人教授の体系的な情報概念を受け継ぎ、情報と人間の「こころ」の理解について、最近、説得的な説を展開しつつあるものに、西垣通先生がある。例えば、『こころの情報学』ちくま新書。吉田教授の説については『理論社会学』東大出版会、二一八ページの諸文献を参照。)

では情報とは何か。私は、以下の三つの意味合いにおいて理解している。

①存在のパターン

情報とは、まず物質(素材、マテリエ materie)のパターン(型、フォルム、form)である。パンつくりでは、捏ねられた粉を一定の形に仕上げる(インフォルム、inform する)。彫刻では素材に形を与える。焼き物では、こねた粘土を一定の形に仕上げる。建築では、設計図(情報)に基づいて形を仕上げる。設計図とは素材の形のありようを示すもので、情報の意味なのである。

遺伝子は生命レベルでの物質エネルギーのパターンである。ゆえに我々の心身も、物質エネルギーのパターンの一種である。このパターンには、いのちの設計図が込められている。

②操作・指令する要因

情報とは、それが向けられる対象物に働きを指示し、それに作用（運動を起こし形式を作ること）を与える働きをもつものである。

遺伝子は、生命活動が始まると設計図として物質に働きかけ、原子や分子の化合の形を決め、身体の複雑な構成物への変化を指示する。人間と人間の間のコミュニケーションに注目すれば、ある人から発せられた情報は、音声に乗り、空気を振動させ相手に伝わり、聞き手の鼓膜を振動させ、意味を伝え、聞き手の側に何らかの反応を起こさせる。

人間関係では「和顔愛語」という。優しい顔を見せ、慈しみの言葉をかけることがいかに重要な作用を相手に与えるか、をこれは教えている。

③意味の体系

人間界にくると、情報とはさらに「知識」であり「意味」である。「価値」でもある。この場合は、特に人間が発信し受信する情報を意識しており、人間が解釈する情報である。

まず「知識」とは、ある観点から秩序づけられ蓄えられた情報である。いわゆるデータは、解釈される前の、素材としての情報であるといえる。観点が決定的である。

一方、「知恵」とは、「活用の知」といってよい。あの人は知識はあるけれど知恵が足りない、というように、知恵は物事を判断し活用するいっそう高い次元での情報を指すのである。この知恵論は、古代ギリシャの哲学者、プラトンの説である。

さらに、人間には知識や知恵だけでない。情とか感情というものがある。これも情報の一部であり、「感性情報」

と呼ぼう。

ホンダの創業者、本田宗一郎さんは、信長が好きだったというが、しかし「信長の悪い点は、何か事が起こると人間の情というものを忘れてしまったことです」と批評している（本田宗一郎『一日一話』ＰＨＰ文庫、七八ページ）。

人間にかかわる情報では、感情抜きの冷たいものではありえないのである。

このような情報の理解においては、物質は「乗り物」（メディア）であり、情報はそれに乗っている「乗る者」（ライダー）である。だから情報は、現実には物質と離れては存在し得ない。

情報のあり場所である脳もまた物質である。それを一部とする肉体という物質システムなしに、「生きた人間」の精神は「生きて働く」ことはない。もちろん、その逆も真である。脳という中枢の情報系が完全にこわれると、植物人間どころか、呼吸もできなくなり、生存不可能となる。

だから、いわゆる「精神と肉体」の対比には、深い誤解と偏見が潜んで来ていることがわかる。精神が肉体と独立に存在するかのような理解。心は肉体の物質エネルギーと独立の何物かであるという理解。はては肉体よりも心が価値が高く、物質に関する活動、経済は心の活動より価値が低い、などなど。

情報論的にみれば、どれも明らかに幼稚な誤解である。

そもそも心（こころ）とは何か。一切の存在が物質と情報とから成り立つという見方からすれば、心というも

のは、人間の「身体系の中での情報系の働き」の他のなにものでもないである。その中心は脳にあり、また中枢と抹消の神経系のあらゆる部分もかかわる。いな、身体の全細胞がかかわる。

中枢から切り離されてはこういうことはあり得ないが、興味深い現象がある。

目が見えなくなって杖を使うようになると、杖があたかも自分の手と指の延長のようになり、杖の先端が道の石ころにさわると、指が触っているかのように感じるという。指の触覚が杖の先端に移動するかのようにである。これも心の働きの延長といえよう。

音楽家の手と指、おなじく彫刻家、陶芸家、画家、匠の方々、舞踏家、俳優さん、篤農家の人々、練達の漁師、樹木のお医者さん、工場の技術者の方々、ことごとく同様の域に達しておられるのであろう。

これを「心身一如」というのであろうか。

情報は、物質という「乗り物」に乗っている「乗る物」だから、身体の物質系と不可分である。右の例で言えば、杖と指とは、情報のセンサーでありかつ運び手、メディアなのである。肉体は心や霊魂の「入れ物」だというような見方は、このようにしてこそ、適切に理解できるのではないだろうか。

なお、肉体と離れて死後の魂が存在するかどうかは、見方にもよるが、「存在する」とはどういう意味か明確でないことと、現世の心と死後の魂とを同一物と見て連続させるという飛躍がある。何らかの魂なるものが存在するかどうかは、科学的、経験的には否定も肯定もできない。今のところ情報論からだけでは何とも言えない。信じるか信じないかである。

分かっていくとは、分からないことを創り出していくことのようである。

ただし、我々人間が実際に生きて活動するときは、「心の能動性」というものに十分注目しなければならない。我々は、「すべては心しだい」「ものはとりよう」、はては「心が存在を生み出す」というような言い方をする。すべて自由自在とはいかぬまでも、心が人間の身体的活動の全体をリードするということはうなづける。そのような理解は十分に正しいといえる。心の能動性は、情報の形成作用の、人間身体における現れなのである。

従来の物と心、心と肉体の対比の仕方は、無意味とはいわぬまでも正確でなかった。それは、このように、情報概念によって正しく理解し直されるのである。特に、今後の脳科学の発展は期待できる。新世紀の経済は、環境科学にもだが、情報科学と遺伝子研究と脳の研究にかかっているとさえいえる。

㈢ 物質代謝と情報代謝

こうして、情報が物質とともに実在であるとすれば、どういうことになるか。人間の経済は物質的な活動であるという限定は仮の立場であって、現代では情報経済という面を見なければならないことになる。物質的な経済の意味が変化したのである。

では、情報は現代の人類の経済でどのような役割を演じているであろうか。

それはまず、社会の再生産が、物質と情報という二つのものの次元で同時的に行われていることを含意する。つまり物質的再生産と情報的再生産であり、両者の間には同時平行性が成り立っているのである。これまでの、

経済といえば物質の再生産だという観念は、修正されざるを得ない。

まず、物質の再生産は、次のような過程からなる。これを「代謝」（metabolism）と呼ぶ。

資源 ⇩ 生産 ⇩ 蓄積 ⇩ 流通 ⇩ 分配 ⇩ 消費 ⇩ 廃棄

例えば、我々の経済では、「たたら」の昔から、鉄鉱石を採掘し砂鉄を取って来て、銑鉄を作る。銑鉄から鋼鉄を作る。銑鉄や鋼鉄は一部ストックされるが、取引され他の企業に流通していく。その鋼鉄から鉄板が作られ、冷蔵庫を作るのに使われる。冷蔵庫は消費され、やがて腐って廃棄処分される。

情報についても、おなじくこのような再生産のプロセスが存在する。

科学技術から例を取ってみよう。実験や観測をおこなう科学者がいて、彼らは情報の第一次的生産者である。「実験」とは、制御された条件のもとで、自然界の情報を発掘する行為であり、「観測」とはある手段を使って行う自然界からの情報の獲得である。

この場合、情報は自然界に内在するのであり、そのように自然界に埋め込まれたものは「情報の資源」である。学問的研究も――人まねでなく独創的であれば――新たな情報の生産である。情報の「生産」は、しかし科学や学問一般だけではなく芸術も、宗教も、人々のさまざまな日常経験もすべて、情報の第一次的な獲得という意味で情報の生産なのである。

人々を魅了する芸術品の制作は、美しさあるいは真実さというような意味での情報の生産であり、コンピュー

タ・ソフトの制作は、ノートやパソコン、料理、冷蔵庫、鉄橋、航空機、建築物などの物的な製品の作成、製造、製作とともに、やはり生産である。

また、資源の意味も範囲も変わる。芸術や学問などの生産に使われる資源としては、人間の頭脳内部の情報が一方にある。美しさの考え、ノウハウなどである。他方に、自然界に含まれる「美しさの素材」や「物事の可能性」などの情報がある。両者ともに資源であるといえるのである。

こうして生産された情報は、一部「蓄積」される。つまり自然界、図書館、人間の頭脳、書物、フロッピー、物的な製品の仕様書などにである。あるいは人間の芸事など技や技能という形で身体に、また慣習という形で社会の文化の内部に、それぞれ蓄えられる。

特にこのように人間の心身が重要なストック機能を果たすのが、情報の場合の特性である。物質的生産ではそうはいかない。作った機械部品を人間の身体内部に蓄えることはできない。蓄えるのは倉庫にである。

なお、情報の蓄積と関連して、「記憶は語り直されることで保持される」といわれる（塩沢由典『複雑系経済学入門』二七一ページ）。

情報の蓄積は、倉庫に溜め込んで取り出さないのではなく、絶えず取り出し、過去の人々と語り直すことにこそ蓄積の意味がある。歴史も情報の蓄積なのだから、繰り返し問い直すことでこそ新たな創造への情報源となる。

情報はさらに「流通」する。それは、人々の間にコミュニケーションという形で流れて行く。あたかも物流と

同じである。物の場合の「運輸」（トランスポーテーション）に対応するのは、情報では「コミュニケーション」である。物の「物流」に対するものは情報では「通信」である。通信には電線とか無線、あるいはネットワークというようなメディア・システムがある。人もメディアとなる。

また人間と人間の一対一の会話、討論、議論なども情報の流通である。討論や議論は場合によっては情報の生産にもなる。

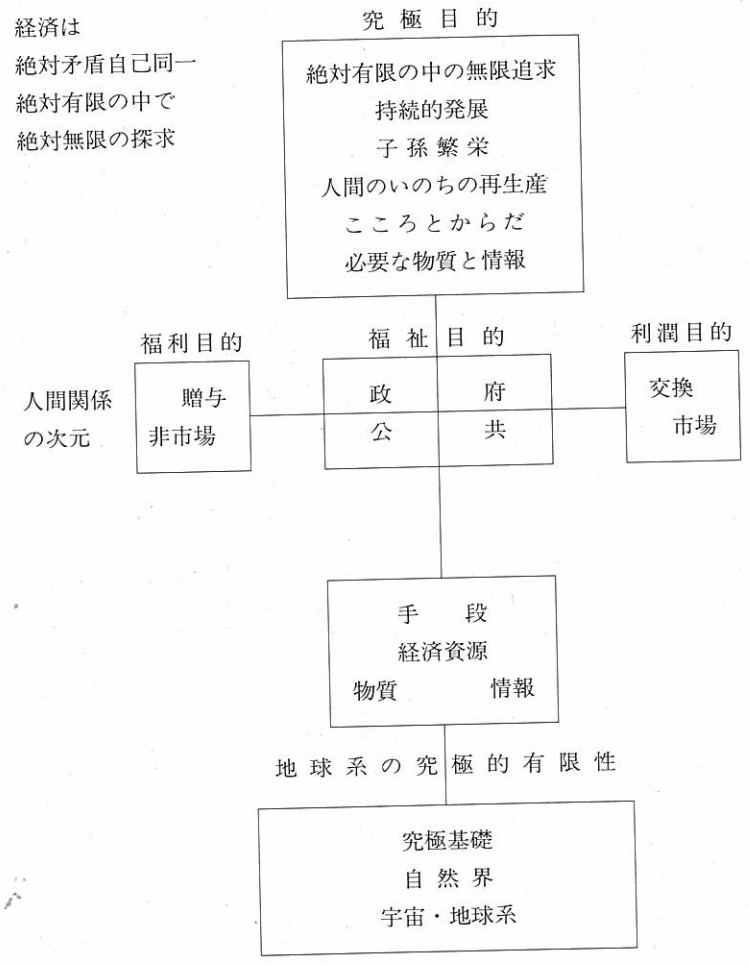
さらに「分配」は、物では物自体の分配（配給はその一例）ということもあるが、価値や所得の分配という形を取ることが多い。情報では、ある特定の情報をグループの会員、組織のメンバー、社会の成員に分かち与えるのが「分配」である。ＣＡＴＶなどのように、会員に特定のチャネルを通じて情報を流すことも分配である。また、情報も売り買いされるから、その限りでは流通と分配は不可分である。

このときも、情報は物と違っておもしろい性質を秘めている。会社のような組織、同好会などのクラブは、特定の情報の分配と共有を通じての人間関係のネットワークであるが、そこで情報が、分配され共有されると、それが資本となり、メンバーの頭脳に新たな情報を生む。情報の化学反応であり合成である。

情報の共有は情報の共同体の形成であり、生産につながることが多い。「三人よれば文殊の知恵」とは、このことを指していったものであろう。

分配された情報は「消費」される。情報の消費とは、情報のサービスの利用である。消費は、情報そのものの

経済の成り立ち



経済とは、人類（個人と集団）の生命の再生産を行い持続的発展（子孫繁栄）という究極目的を実現するために、手段として自然界から資源（物質と情報）を獲得し、それを加工し、交換（市場）と非交換（贈与）とを通じて、財を処理する活動（合理的かつ非合理的活動）である。それは資源採掘、生産、蓄積、流通、分配、消費、廃棄再処理からなる。

ストックされた製品を使い壊してしまうこともあるが、それは米を煮て食べてしまうことにも似ている。例えば本を「読み破る」ことを読破という。テレビをみることも情報の消費である。相手の話を聞いて楽しむのも情報の消費である。

最後に情報の「廃棄」は、こうした消費と不即不離の形で行われる。廃棄という場合は、情報を乗せた「メディアを廃棄する」という方法で行われる。そして、消費された情報、さらに廃棄された情報自身がリサイクルされうるかどうかは、議論の別れるところだが、情報の廃棄の仕方にもよる。

人の身体も含めて、ストックするメディアが消失してしまって社会に同じものが二つと存在しなければ、その情報は再び利用されることは不可能となろう。

伝統芸能や技能での人間国宝の方が亡くなると、後継者が育っていなければ、その芸能や技能にかんする情報は、社会から消えてしまう。インカ文明のように滅んでしまう文明もあり、それはその「文明の情報」が消えてしまうことである。南アメリカの巨大な地上絵はだれがどうして描いたのか、分からない。

しかしある百科事典を一揃いまるごと廃棄処分にしても、同じ種類の百科事典は社会に幾つもあるから、情報は消失しない。辞典を構成する物質が廃棄されるだけである。ここに情報の特殊性がある。物的手段から乖離するという性質、あるいは他の物質の乗り物に乗り移れるという性質がそれである。

情報は舟なしには動けないが、舟から舟に乗り移ることはできる。義経の八艘跳びよろしく、である。物質は

そうはいかない。情報は人間から人間に乗り移れる。人間は物質と情報の合体物であるからである。これがあるからこそ、感化とか教育が可能となるのである。

物質に縛られた経済は、情報の自由な移動に向けては、開かれた経済となる。

これまで見て来たことから容易に理解されるように、経済の意味は大きく変化した。経済は物質にかかわる低級なもの、しかも物欲にとらわれたものという偏見も払拭された。

まず第一に、経済は物質にかかわるという定義は修正された。経済は物質と情報とにかかわるのである。経済は、物質から切り離されはしないが、物質主義からは解き放たれたのである。

また第二に、情報を視野に入れると、経済は物財の交換、売買よりも広い意味での活動となる。

なお、先にも少しふれたように、私は、情報革命のもとでは貨幣の理解においても新たな革命が起こると考えている。貨幣論は、歴史上、ふるくからの「商品貨幣説」から、ケインズの「流動性選好説」に移り、そこで停滞している。情報論からの新たな革命が必要なのであり、また可能なのである。「情報貨幣論」がそれである。若干の内容は、すでに発表したことがある。一九九七年「ＳＡＳＥ」会議、於ウィーンの国連事務局。

六　経済と心身一如

(一)　物心一如

経済をめぐる指針に「物心一如」という言葉がある。これ以外に、「心身一如」、「心身不二」、「自他不二」という表現もある。これらは、若い世代では、仮に頭のなかの辞書には書いてあってもほとんど引き出して使わない言葉だけれども、我々の先人が好んで使って来られた言葉である。我々の世代でも、同じ意味のことは言うのだが、言葉としては使うことは稀（まれ）である。

しかしこれらには、同じような表現であるのに、微妙に意味の違うものがある。ここに引いて来た一如とか不二は、その例である。仏教で使われて来た用語には、同じ漢字でも宗派により違った読み方をするものか。呉、唐、漢。福州、北京、上海・・・　時代と所とでいろいろ発音が異なる。

物心　一如（ブッシン　イチニョ）
心身　一如（シンシン　イチニョ）

とはいう。そして、

自他　不二（ジタ　フジ）

とはいうけれど、しかし

物心　不二（ブッシン　フジ）

とはいわないようである。

私のワープロでは、フジは出るが、フニは出ない。私は確か、フニとも習った覚えがあるのにである。フニは記憶違いだろうか。ちなみに、私はまだやっとワープロ世代。わけあってコンピュータは使わない。使えない。えとわでは、大きな違いがある。

ただし、コンピュータを使えないと情報のことは分からぬ、というが、それは「分かり方の違い」であろう。車の運転はしなくとも、交通システムは研究できて、理解可能である。コンピュータのみが情報処理システムでもない。

中国での発音はともかく、職人、匠（たくみ）、篤農（とくのう）、演芸など、技（わざ）の世界では、一如とか不二という表現にときたまお目にかかる。物と心、身と心、という二つの存在の間に、なにか切り離せない独特の関連を見いだしているからであろう。

一体、一如と、不二とは、どう違うのであろうか。一如は「あたかも一つのごとし」であり、不二は「二つならず」「切り離せない」、「異ならない」という意味なのであろうか。

先頃、能面を「打つ」（彫るとはいわないそうである）すばらしい方とお会いして来た。その匠（たくみ）の名は、桑田能忍さん。私はこういう匠の方に弱い。感動する。桑田さんは古い民家にお住まいだ。

所は福井県池田町、「村起こし」で有名。ソバがとっても美味しく、永平寺の山越えの西側の方角に当たる。長野県と山形県がソバで古里起こしをやっているという記事がある業界新聞にのっていたが、量での比較はともかく、越前ソバも味の点では忘れられない（『麺業新聞』風見鶏、平成十一年十二月十日号）。

私は、神楽の国（出雲ではなく石見）の生まれである。神楽のお面には昔から興味がある。能面ではしかし、物の本によると、基本の型は既に室町時代に出来上がっている。あとはそれを匠が各人なりに「うつす」のだそうだ。写すであって造るではない。伝統とはおそろしい。

ところが、近年の神楽では必ずしもそうではない。村起こしとかで、どこでも神楽が盛んなのであるが、プラスチック製で、随分と下品でけばけばしいお面にさえ、お目にかかる。

芸術性には、伝統と保守主義とが必要な領域もあるのだろうか。ピカソ的な前衛などが出てくる可能性はないのか。

一体、能面には創造はないのか。それが大いに可能なようなのだ。その秘密は、情報論的に考えると、どうやら「心身一如」にありそうだ。

私などは軽率だから、能楽でも「もっと、どんどんイノベーションを行えばよいではないか」などと、すぐに空想を逞しくしてしまいがち。どうもこれがいけないのだろう。現在の経済はビジネスである。しかし、ビジネスとは「ビジィなこと」（busy-ness）になってしまった。そこで考えた。イノベーション理論を作り変えるべきである、と。

イノベーション論の家元は、言わずと知れたJ・A・シュンペーター先生。ウィーン育ち、若き天才。ハーバード大学の経済学教授として、幾多のノーベル賞受賞者を育てられた。先生によれば、イノベーションとは、次の五つの変化の総合である（『経済発展の理論』、『資本主義、社会主義、民主主義』）。

① 新しい生産物の創造
② 新しい生産方法の創造
③ 新しい資源・原材料の開発
④ 新しい組織の創造
⑤ 新しい市場の開拓

これを能楽という芸術に当てはめると、こうなるだろう。

一、新しいドラマの創作
二、新しい演能法、舞台装置、道具類などの創造
三、新しい道具の素材などの創造
四、新しい演技者の組織・役籍（役割）
五、新しい観客、鑑賞者の開拓

しかし、ちょっと待った。このように安易に考えるから、ビジネスがビジィなものになるのではないか。事を急いではならない。

私は、体を壊してから遠慮していたが、最近、再び各地の調査に出掛けることが多くなった。すると、「古いものが新しくなる」という事実に出会う。それは、古いものを壊すのでなく、「古いものをより長く保存する」とい

う意味である。古い歴史を秘めたものは、一日だけ古さを加えることが、まさしく一日だけ新たな「古さ」の創造。一日ではあるがより古くなった世界を創造することである、「といえる」のではなく、「事実そうでしかない」のである。私は、このことを痛感する。

私はここに、「古くなること」へのイノベーション、「歴史」へのイノベーションがあると思う。だから、「千年一日のごとし」という。ここに歴史に向かうイノベーションもあるのである。いや、なければならない。イノベーションとは、未来へ向かうものばかりではない。

よく考えてみると、一日古くなるとは、未来へ向かうことである。古くなることで創造される価値はやはり、時間の矢が未来に向かうからこそ、古さへのイノベーションとなる。

温故知新というではないか。創造的破壊ではなしに、「創造的保存」である。それゆえ、私の右の能楽イノベーション仮説は、戯（たわむ）れに過ぎなかったのだ。

老人の価値もこのように見ることができる。老人の知識は古くなり流行に遅れていく。しかし老人にならないと分からない経験がある。知がある。経験「も」という付け足しではなく、経験「が」というべきものがある。足腰が痛くなることも。病気がちになることも。しかしまた、季節をしみじみと味わうことも。孫が育ち、近所の子らが大きくなることも。みな老人にならないと味わえない体験的な「情報」である。書物は地図に過ぎない。行ってみないと地図ではわからないことがある。若いという価値とともに、人生としてはそれと同格の「老い」という価値があるのである。

今までの経済においては、老人は生産要素としてはポンコツ車で、いわば「粗大ごみ」扱いになる。しかし、老人の意味が再評価されて来るのではないか。来なければならない。

また、人間の「心身一如」には、経済として、研究すべき秘密があると思う。匠と技・業の世界である。山根一真さんが、「メタルカラー」という連載を『週間ポスト』に載せておられる。現代技術の世界でも、物に打ち込み創造する姿、人間的要素と物質との交流が描かれている。

物理的にまったく形の同じものを作るだけなら、最近の家具とかおもちゃなどの製作で行われているように、コンピュータ・グラフィックスを基礎に、自動製作機械を使えそうである。

しかし、それではうまく行かない領域があるだろう、と私は推測する。機械ではどうも真似（まね）のできない世界が、美の製作にはありそうなのだ。作るのは人間。だから素材の物質と、デザインの情報と、人間の心という三つのものの「関連」がある。私は、これは経済にとって研究すべき未開の領域ではないか、と思う。これから、自然も物質もますます重要さを増す。

しかし、人間という物質情報体こそ、最も未開の資源であり領域ではないか。

経済において、物心一如という言葉は、それゆえ重大な意味を秘めていそうである。ノーベル賞をもらった人の書いたアメリカの経済学教科書などには、これは、しかし微塵（みじん）も発見できない観点ではある。

(二) 「物から心へ」論の誤り

ところで、社会哲学者、故、難波田春夫先生は、いちはやく、「経済は美に向かうべきだ」といっておられた。つまり、我々人間が幸福になるには、三つのものが必要である。一つは、科学技術の発達と、それによる産業経済の発達である。第二は、開発されていない自然である。そして第三は、「生活の美化、より一般的にいうならば文化である」。「三者は相互に矛盾している。にも拘わらず、人間にとって、人間の幸福にとって、そのどれも必要不可欠である」。(小冊子「欧米雑感」昭和四十六年一月)

一切の存在を情報と物質という観点から見ること、いいかえると自然、社会、人間身体の一切を物質的かつ情報的に理解するとすると、こうした美というような性質の物事(美は物か事か)はどう理解されるだろうか。

私は、こういう領域を探求して行くと、これまで述べて来たような経済に関して人類が陥って来た数多くの誤解が、事実の展開により氷解するのではないかと期待している。

なかでも我々の最たる誤解は、「物から心へ」という関係づけにある。いわく、時代は物ではなく心に向かっている、「心の時代だ」と。これは、古い経済だけでなく、現代の新しい経済を理解するうえでも、しつこく生き続けている根の深い誤解である、と私は考える。皆さんは、そうはお考えになられないだろうか。

まず物とは何かは、究極の微細なところに行くと物理学でもまだ論議の定まらない所であるが、我々人類の日常的意識からは、原子、分子とからなり、一般に気体、液体、固体という形態を取って、我々人間の生活に直接

間接影響し(プラスの影響とばかりは限らない)、生活に必要な物の素材として使える存在だ、というくらいに理解しておけばよいだろう。

宇宙線、宇宙からの流星、電磁波、太陽熱(光線)などのエネルギーも、もちろん物質に含まれる。我々の経済の観点からは、物質とはこの程度に理解しておけば十分である。

さて、年来の疑問の解消に取り掛かろう。そもさん、日常的にいわれる「物から心へ」という対比は、正しい対比なのであるのか。それは、比較の上での誤謬(malcomparison)ではないのか。物と肉体という対比は無いのか。心と肉体との対比は行う。心身というようにである。

だがそもそも、我々の心の志向する対象が「人間の身体の外にある物質的なものか、心の内面か」という問いの仕方が、多くの誤解を生むゆえんである。

我々の心には、外と内という反対方向に物事を理解するという志向性があるのはよく分かる。

がしかし、外なる物質的な物から離れた「内面の心」というものは、はたして外の物質から独立に、存在するものか。また、物は身体の外にしかないのか。身体の内面には、心しかないのか。肉体という物質が内面にあるではないか。その肉体と心は、相互に作用はしないのか。

例えば、赤い夕日をみて「美しい」と感動するとしよう。感動はたしかに心の内面の現象であり、外から目という感覚器官に入って来た自然光線の特殊な波長が、感覚器官を刺激して起こる。これは、情報的にいえば、外からの情報が「身体に記憶され蓄えられていた過去の経験の情報」とも反応し連想しあって、美しいと表現され

る情報を生産するプロセスである。だからこれは、一種の物的かつ情報的（精神的）なプロセスである。「かつ」というところに、一如という意味がある。

物から心へ、と心を強調する場合の力点は、心身内部での感動や喜び、満足・充実という情報現象にあることは理解できる。しかし内面の感動といっても、外面の条件、この場合でいえば太陽と自然条件というものが、身体の外にあるからこそである。であるからこそ、内面の志向性にそって感覚器官と神経系が作用し、感動という現象が出現し得るのである。

たとえ寝ていて、太陽を見ていないときに、夢の中に美しい夕日の感動が現れたのだとしても、それは過去に起きていたときの類似の経験の情報が脳にストックされた情報（先入観のひとつ）として存在し、それが今脳の内部で加工され、夢の舞台の意識に引き出され活性化したのである。このように理解される。この点に関連ある次のような重要な記述がある（西垣通、〇七一ページ）。

ガダマーによれば、ヒトがテクストを理解するとき、そこには必ず何らかの「先入観」もしくは「了解」(Verstehen)が働いています。この先入観は、歴史的文化的に出来上がったものでもあり、また個人的な体験から生まれたものでもあります。ヒトは先入観にもとづいてテクストを解釈し、また、その解釈行為によって当人の先入観そのものも変わっていきます。こういった自己循環的なシステムのなかで、〈意味〉が出現するというわけです。

ここでいわれる「体験」とは、各人のこれまでの人生における情報の蓄積と記憶であるとすれば、各人の脳内にストックされた情報が引き出され、夢の舞台で作用し、意味を生み出すということになる。つまり我々は「意味」を作るのである。

私は、アメリカのディズニーランドを一九八〇年に訪問した。その後、日本にもディズニーランドが作られたが、作った方は、私の尊敬する実業家である。しかし私は、東京ディズニーランドには決して見物に行かないことにしている。けだし、アメリカでのイメージが壊れるのが惜しいからである。新しい意味を創りたくないのである。

身体の内と外とは、心の方向性の問題としては正反対だが、実際に生きて働くときには内と外とは情報的にいつも切り離せず連動している。そして、外の条件や環境は、それをもとに作り出される身体の内部の「心の状態」（つまり情報の状態）の実現を、その最終目的とする。外部の物的条件は、その限りで役立つし、価値があるということになる。

しかし外の条件との関係がないと、内部の心の状態も生まれてこないのである。ここに経済というものの苦しいところがある。簡単に心だけに逃げ込めないところがある。

「宇宙においては、存在することは関係することである。」（T・D・ワインバーグ『応用一般システム思考』紀伊国屋書店、五ページ）

我々の暮らしに例を取ると、自動車は物質であり、また情報の乗り物でもある。それを買って乗る目的は、速く走るという自動車の「物質的働き」を使うことと、スマートだという「感じの情報」をエンジョイすることとの、合体である。

物的な便利さと情報的なスマートさの感覚から得られる、満足や喜びという心の状態を、「効用」（utility）という。肉体という物質の乗り物に乗った、心という乗り物・情報の価値づけがそれである。我々の一切の行動のねらいは、この「効用」（満足、よろこび）を高めることにあるといえる。この効用は物心一如の効果である。

(三) 物も変わり心も変わる

しかし、いきなり物と心とを対比し、「物より心である」、「経済ではなく精神だ」「ものから心へ」といったりすると、対比の仕方が間違ってくるのではないか。もちろん、前に見た「心の能動性」は、心という情報の働きとして十分に承認しなければならない。けれども、外の物質及び情報と、内の物質（肉体）及び情報（心）とは、乗り物と乗る物との関係において、不可分であることを忘れてはならない。

外部		内部（人間）
物質　自動車の速さ	⇩	肉体の速い移動（これも目的）
情報　自動車のスマートさ	⇩	心の満足（これも目的）

車を走らせる。風を切る。タイミングよくハンドルをあやつり、車を意のままに支配する。野性的な力を自分の中に感じる。これも、一種の「心身一如」である。

いわゆる「物から心へ」という主張の真意は、どこにあるのだろうか。人間の心身の外にある自動車のような物的生産物を消費するのは、その究極目的が人間の肉体と心とを高めることにある。特に心の満足にその最終目的がある。だから、環境問題を心配しつつ、外界の物質の消費はできるだけ押さえて、内心の満足に注意を向けるべきだ。このようにいうのなら、話はある程度、納得できよう。

いわゆる「物から心へ」という主張は、我々の心の指向性が外なる物質に向かっていたのを、「内面の心」の方向に変えるべきだという指摘であろう。しかし、実はそんなことならば、いわれるまでもなく、ほとんどの人々には了解済み。人々はそれほど愚かではない。実は初めから、いつでも、内面の心の状態に指向性の最終目的はあるのである。それならば、いまさら、あえていうまでもないことではないか。その程度の勧告ならば、人類の知恵のプールの水を一滴も増やさない。

だから、「もう物の時代ではなく心の時代だ」という言い方は、不正確であり、不徹底なのである。「物質はいらない。心が物質に取って代わる」などというのであれば、なおさらこれは内と外の関連を正しくとらえていない。そんな議論では、人を誤らせること甚だしい。

私は、本当は「物質も変わるし心も変わる」というべきなのだと考える。

的確にいうと、「外なる資源の消費を出来る限り押さえよ」「より少ない資源消費でもって身体の内なる心（正確には心身）の充足を最大限にせよ」「それを可能にする心の技術を開発せよ」と。これが、まさにこれからの時代にとって意味のある方向性であると思う。これが、地球有限時代と情報経済時代の原理なのである。

よき消費は美徳である。よき節約も美徳である。

心の問題は、むしろ人類全体のエゴ、集団のエゴ、各人のエゴ、エゴというよりもっと深く無明にある。『聖書』に注目すべき一節がある。（マルコ七・一八以下）

「すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことはできないことが分からないのか。それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。」（しかしこういっても、公害、汚染の発生に目をとじてはならない。）

ところが、

「人から出てくる物こそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出てくるからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらはみな中から出て来て、人を汚すのである。」

物質の扱い方も、環境問題も、我々の中の心次第である、と考えられるのである。

評論家とは、時がたてばすぐに無益となる軽薄なキャッチフレーズを投げ上げる。そのことに長（た）けた専門家である。

「重厚長大ではなく軽薄短小だ」とか、「物から心の時代へ」という。一体に、キャチフレーズという代物は、どうも真理の片面を強調し過ぎるのである。今流行のジャンボジェット機は重厚長大ではないのか。高層ビルは重厚長大ではないのか。なるほど部品は軽薄短小となるが、それこそは重厚長大を可能にするものでもある。

物事は、その三六〇度を観察しなければならない。

この観点からすれば、すでに目的手段思考のところで少しふれたが、「効率性への批判」などは、まったくの的外れである。効率性は、地球資源を節約しながら人類の目的を最大化することにとって、不可避の基準である。資源の利用を効率化しないで無駄使いすれば、地球の資源はすぐに無くなるではないか。

ゆえに、効率性への批判の真意は、「間違った目的を反省せずに、それを一生懸命追及すると、人間性を損ないますよ」ということでなければならない。それなら話は簡単である。

ならば、「正しい目的を立て、しかも正しい方法を使ってそれを実現しよう」と言えばよいではないか。それを、不正確に一般化するものだから、効率性批判は的外れとなるのである。

我々は、物事を考える際に、「論理の擦り換え」とか「過剰な一般化」を十分に警戒しなくてはならない。従来の倫理道徳論が行う経済批判において特に著しいのだが、我々人類は、「えてして間違った問題を立て、正しい方法でそれを解こうとする」動物らしい。

それでは、解き方は正しくとも、正解は出てこない。偽（にせ）の解答が出るだけである。それが効率性批判である。

古来、経済への批判、物欲への批判が、結局いつも裏切られ、失敗して、結局、人類の物欲を押さえられなかったのは、どうも間違った問いを立てて、それを正しく解こうとしたからではないだろうか。

我々は、「正しい問いを立て、それを正しく解かねばならない」のである。

七　これからの経済原理とは

㈠　非市場的な経済の重要さ

グローバル化、開国と市場化、これは世界的な、避けられない潮流である。しかし、人類の経済社会は、一つの原理だけではうまく動かせない。必ず反対の原理を必要とする。ローカル化、規制と非市場化、これである。「グローカル」（グローバル＋ローカル）というスローガンが台頭するゆえんがあるのである。

人々は、旅に憧れ旅愁に心も漫（そぞろ）となる。しかし故郷を思わざるをえない。郷愁に心は焦がれる。

今から三〇年近い昔、一九七〇年代初期のこと。東南アジアの一国、タイ研究の専門家の方たちとともに、農村をあちこち調査したことがある。夜は村の家に泊まり、翌朝早く起きて村の広場に出掛けると、住人たちがそれぞれの家庭でつくった料理を持ち寄り、物々交換するのではなく、金額は小さいが貨幣を使って売り買いする光景が見られた。タイの北部のその農村では、娘さんが農家の跡取り（相続人）となり、両親と一緒に住むということであった（女系相続制）。

ちなみに、農業が主であった時代のことだが、タイでは南半分は個人主義が強く、北半分では連帯主義が強い、と教えられた。教えてくださったのは、アジア経済研究所時代、私の東南アジア調査の先生、野中耕一さん。

南では水田耕作は天水（雨季の雨水）による。だから農家は天とのみ相談すればよい。隣りの農家のたんぼとは関係ない。いつ田植えをしてもよい。しかし、北は灌漑農耕だから、隣も一緒に田植えをし収穫もしなければならない。隣とリズムが合わねばならない。連帯という絆が欠かせないことになる、と。

これは、「なるほど」といえる人間論である。地理的決定論ではないが、風土と人間関係の論理とは、思わぬ所でかかわりをもつようだ。

しかし、農村にはまだ貨幣経済でない経済が色濃く存在した。日本の農村には、かつて「結い」（ゆい）という仕組みがあって、特に稲を植える時期には適期の時間が短いから、いっせいに田植えをしなければならない。そこで、手の余った家は手の足りない家に手助けに行く。そこの田植えが済むと、次々と忙しい家を皆が手伝ってまわる。こうして、結局、皆で皆の家の田植えを共同で行うことになる。一九四五年の敗戦後――単なる「終戦」ではなく「敗戦」であった――間も無いころとて、主人が戦死した家もあり、その時は、もちろん女性も「一人前」として評価された。この点は強調しておきたいと思う。

また茅葺きの屋根は、一〇年とか二〇年毎に葺（ふ）き替えねばならない。葺き替えはとても一家の労働力だけでは不可能である。そこで、隣り近所、親戚から、こぞって手伝いに行く。仮に私の家が手助けにより葺き替えたなら、一〇年後に他の家の葺き替えをするときには、私の家から、前に来てもらったと同じような能力をもっ

た人間が、手助けに行かねばならない。これは世代が代わり父の代から子供の代に移っても、継承される。

このシステムも世代を越える結いである。一種の互酬制（ごしゅうせい　reciprocal system）であって、普通の市場における売り買いではない。

興味深いシステムを、もう一つご紹介しよう。村の中を村道や県道が走っている。国道の場合もある。それぞれの村、あるいは地区の境目から境目まで、毎年、二度くらい、住民が総出で道路整備の労働を行う。これはいわば労役での納税に等しい。租、庸、調の庸。皆、喜々として仕事したものである。私も高校生であったが、父の代わりに出たことがある。これは、公共経済への住民参加である。金による納税でない形式での参加である。これだと、道路改善という目に見える結果が、住民の義務遂行と直結する。

村の水道、農業用の水路にも、似た方式が存在した。いまは何でも金銭による納税、仕事は行政が雇った業者が行うという方式で、便利ではあるが住民の参加意識は薄い。ボランティアといって遠回りをしなくとも、ゴミ処理でも、環境美化でも、福祉でも、住民参加方式はつくればいくらでもできるのではないだろうか。金銭方式が支配的すぎるのではないかと、私など古くなりかけた人間は思うのだが。

経済とは人間関係でもある。だから私は、前に、経済は交換と市場として理解される一面を持つと述べた。故ケネス・ボールディング教授（こそは）、ノーベル賞をもらっても不思議でなかった偉大な学者だが、――しかし通常の経済学にはあきたらなかったので貰わなかった。教授が、人類が社会を造るときの方法に三つのものがあるといっている。交換（市場）と、脅迫（強制）と、愛（統合）である。これはまことに興味深い見解といえる

（『経済学を超えて』竹内書店、『地球社会どこへ行く』講談社学術文庫）。

①交換とは、善（財　good）と善（財　good）の取引であり、善の相互提供である。

②脅迫とは、相手に善を強制的に提供させる方法である。

③愛とは他者に善を対価なしに進んで提供するものである。

人類のすべての社会には、必ずこの三つの要素が含まれる。社会毎に異なるのは、ただこれら交換、脅迫、愛という三つのシステムの組み合わせの比重でしかない。

我々の社会における経済の仕組みは、市場だけではない。市場でないシステムも不可欠なのである。現代は社会主義が破産したので、グローバル市場化といって、市場経済だけが大流行である。確かに旧ソ連のように自由な市場がなかったところでは、市場の役割は一層高く評価されるべきであろうが、しかし社会は市場だけでは作れないことを、我々はもっと知るべきである。

(二)　エコロジーからの知恵を

人類の社会は、いろいろなタイプの相互依存のシステムから出来上がっている。それを理解するための知恵は、生態学（エコロジー）という学問から借りてくることができる。それを支える哲学は「エコフィロソフィー」、つまり生態系（エコシステム）に埋め込まれた論理であり、法則であり、知恵である。

エコシステムでは、異なる生命が、物質とエネルギーの循環と流れを通じて、相互依存関係を作り上げている。そのとき、同時に情報も動いているはずである。相互依存関係には、次のようにさまざまな種類がある。

①相互競争　互いに相手を排除しあう関係。弱肉強食の関係が現れる。稲と雑草、アユ同士の追っかけあいなど、縄張り争いがこれである。

②片側競争　一方が相手を排除する。他方は排除しないか、包み込む(他方が十分有力な場合)。例えば、森ができる途中、高木になる樹木は最初雑草とか低木に負けるが、やがて高い樹は他を追い抜いて聳(そび)え、その下で低い木たちがせめぎあい、高木の栄養分も奪うが、高木はそれを許すのである。

③寄　生　一方が小さくて、十分に有力な他方に依存する。その有力な他方は小さい一方を受け入れる。森林に行くと、大木に葛(かずら)が巻き付いているのが見られる。大木は「かずらの寄生」をある程度までは許す。人間の親子も同様といえるか。子供は、親のすねをかじるネズミか。

④捕　食　強力な一方が弱い他方を食べてしまう関係。弱肉強食の闘いが現れる。例えば、ネズミをねらうトンビのようにである。

⑤相互扶助　一方と他方が互いにプラスの作用を与え合う。レンゲなど豆科の植物は、混植すると空中の窒素を固定して、稲や牧草などを助ける。

⑥中　立　相互に無関係、無影響の関係。実は生命体は、生育する空間が重なると、現実には無関係という関係はありえない。

現代では、競争(competition)とともに「共生」(symbiosis, co-living)ということが強調される。英語で kyosei(キョーセイ)という単語さえできている。日本発の新しい英語である。

しかし、有限の世界である経済では、どうしても競争を避けることはできない。この世に生命をうけた者がみな、ひとしなみに「天寿をまっとうしたい」というのは、誰しもの願いである。しかし、現実には大部分、排他的な競争に巻き込まれ、「結果として共生へといたる」という道を採るほかないであろう。

この場合、競争にも相手を完全に排除しないやり方はある。片側競争、寄生などである。しかし、これは一般化できないであろう。「片側競争」は、一方が十分に有力で余裕がある場合には可能であるが、資源節約的とは限らない。また、弱小な者が有力な者におんぶするというような「寄生」の関係は、思ったほど社会にプラスの効果を増やさないはず。

なお、ボランティアは、するほうもされるほうも、その精神には高尚から低俗までいろいろなものがありうるが、一部分、寄生と同じ性質の関係であるという面を有する。

ちなみに私は、マザー・テレサさんの行った奉仕は、崇高なボランティアであるとして、心の底から称えたい。まさに「一隅を照らす」である。

しかし、私はインドにはよく訪問するが、あのような行為は悲惨の防止にはならないと見る。出来(しゅつらい)した悲惨の軽減にはなるが、テレサさん自身がかつて言われたように、「行き倒れになる人を減らす政治経済」をこそ、求めるべきなのだ。

医療でも、治療医学はもちろんだが、できうれば予防医学のほうが、より必要なのである。病気の発生を放置

するより、発生を押さえる努力に資源を注入するほうが、資源の節約になるのである。ごみの発生を押さえるほうが、発生したごみを処理するより、費用の節約になる。室内を散らかした後で整理するより、いつも散らかさない努力をする方が、ごみ処理の努力は少なくてすむ。

一般に予防の方が、治療より費用が少なくてすむ。これは「エントロピー法則」の応用である。

ボランティアというものは、一方の弱小なものを、余裕のある有力な他方が、愛によって受け入れ、支援する関係である。そもそも、そうでなければボランティアははじまらない。それは、たしかに精神的にみて社会に愛という美徳を増やす効果があり、人々の内面での喜びを高める。しかし、時には利己的な名誉心、自己満足から行われるという場合もある。

これからは、「ボランティア革命」がますます重視されるに違いない。世は、グローバルな市場競争が弱い人間を吹き飛ばす、という余りにも荒々しい資本主義の時代だから。失業者も出るだろう。そうなると、国家的計画や行政経済でなく、市場競争経済でもなく、その間にあって欠くことのできない役割をボランティアは演じるであろうし、そうでなければならない（セイフティーネット、安全弁、安心装置のひとつとして）

しかし、ボランティアが、資源の節約になるかどうかは、必ずしも明確ではない。

現世に生きる我々が、互いに喜び合いながら、「地球を浪費する」というのが現代経済でもあるからである。ここは微妙なところで、覚めた認識と知恵を働かせる工夫が期待されるゆえんである。

また「捕食関係」は、肉食獣と草食獣の関係のように、数を調節する作用が内在するもので、安定性をもつ。強い動物が餌の動物を取り過ぎると、餌が不足して強い動物自身の数が減る。「おごれるもの久しからず」である。

次に「相互扶助」はよく行けば相互に利他性を実現できる。あるいはそこまでなくとも、利己性と利他性のバランスを実現する。しかしこれも、十分に注意すれば資源の節約になるが、うまく行かないと互いに資源の浪費にふけるということにもなる。つまり、現代世代のみで楽しみをエンジョイし、未来世代にとっては利用できる地球資源が不足する、という悪しき刹那主義に陥ってしまうだろう。

現代世代と未来世代のあいだの相互扶助のシステムを、人類はいまだ発明していないのである。

我々は「子孫に美田を残さず」というが、しかし人類全体としては子孫に美田（豊かな地球）を残さねばならない。

倫理道徳には、人類全体の場合のそれと、その中のメンバーにとっての場合とでは、一致しないことがある。これをマクロとミクロとの矛盾という。部分にとってよいことでも、全体にとってはよくないことが沢山ある。

私は、これからの人類に求められるのは、市場競争システムのほどよい上手な活用と、非市場の相互依存システムとの適切な組み合わせであると考える。

情報革命で瞬時に情報が世界をつなぐという点を考えると、世界を競争的市場システムのみで組織するという

のは好ましくない。市場は、ある程度資源の世界的な最適配分を保証する意味もあるが、不確実性を高め過ぎて、経済をトータルに「不安定化」させるというマイナス効果もある。このことを、十二分に警戒すべきであると思う。皆さんはいかがお考えであろうか。

社会主義的な国家計画は失敗した。それは、マルクスの憎悪（羨望、ねたみ、ルサンチマン）に満ちた階級対立理論から出発したからである。

これからはより進んだ地球的観点からの計画と共生システムを構築しなければならない。また、「地球的計画」とともに、競争を経ないで相互依存を図る「非競争的システム」が不可欠となるであろう。

資源節約的な科学技術の開発と共に、競争でない社会システムの開発こそが、これからの課題となる。いわゆる計画、競争、非競争という三つのもののトリアーデ（三位一体）をつくることである。

また、そのさい根本的に重要なことは、競争的な相互依存にせよ、非競争的な相互依存にせよ、我々一人一人の人間の活動の「精神的内容」、心の中身が大切だということである。我々は、ガリガリの利潤主義者になりやすいけれども、競争の精神的内容、非競争の精神的内容を問題にすべきところに到達したのではないか。これは共に、内なる世界の開拓にとっての根本問題である。

相互に、上手に、「助け助けられる」、「依存し依存する」というシステムである。（久保田浩也『毎日五分、元気が出るこころの体操』成美文庫）

㈢ 永続的発展――有限地球の中での内的無限の探求へ

人類の行く手には、いかに情報革命をもってしても、越えられない課題がある。経済が「有限の中での無限の追及」という本来の性質を、地球的スケールで帯びて来ていることである。我々はそれにどう取り組むべきか。経済の基本的意味は不変であるが、今その現れ方は人類史の現段階で非常にドラスティックな変革を迫られている。それは、地球の有限性がますます自覚されねばならないようになってきたからである。

つまり人類の活動スケールが、地球の物質的システムに、影響を与え、攪乱する要因となるまでに至ったからである。いまや物質は無限ではない。地球は有限である。現代の経済は、有限の自然の中での人間の無限追及なのである。物質的には、有限の中での無限追及の営みである。

国連の舞台で共通概念となった「持続的発展」（永続的発展 sustainable development）という考え方がある。これは、地球の有限性を考慮したもので、人類の将来にとっての、資源節約的で永続的な経済にとっての、根本指針である。それはまさに、一言でいえば有限性の超克、有限の中での無限追及ということにつきる。

すでにみたように、地球の物質的な有限性は否定できない。増加する世界人口に対し、我らが地球の物質（及びエネルギー）の総量は有限である。発展の天井はさして高くはない。二十一世紀には限界がくると予測される。外なる自然は有限である。

そこで戦略転換が求められる。外から内への視点の転換である。もちろん、既に述べたように、外を無視してそれと無関係に精神とか身体を理解するのは空想であり、不可能である。しかし、慎重に外との関係を意識しつ

つ、内なる世界へと方向性を移動させることは、これからの時代、不可避であろう。

我々は「物から心へ」というし、「心の時代だ」ともいう。なるほどこれは響きのいい言葉である。しかし私は、本当に意味のある言葉なのか、今一度、徹底的に検討されねばならないと思う。我々は、どのような意味をそれに込めるべきなのか。

情報も物質もともに視野に入れて考えると、経済の可能な方向性は、人間の内的世界、つまり心身の内部を開拓するという方向しかないのである。我々に必要なのは、これに照準を合わせて心身の外の世界も整え、生き方の指向性を変えることである。その意味でなら、「物から心へ」という表現は、どうにかうなづけるものだろう。

内なる世界には、それ自体非常に未開拓の領域が残されている。例えば、言葉ひとつをとっても、痛みや喜び、味わい、悲しみ、元気など、心身の内部の状態を表現する言語記号は実に貧弱である。人類がこの領域を十分に発展させて来なかったからである。

その限り、人間の内的世界の潜在的な可能性は大きいのである。

しかし、情報革命の中では、単に心というだけでは、内容が空疎である。心とは何か。経済にとっては、これを問わねばならない。つまり我々は、情報革命とともに、次の問いを避けては通れない。外の物質の世界は有限だが、情報は無限か、という問いである。

また、次の問いも重要となる。情報革命とともに内的世界が拡大するかどうか。ヴァーチャル・リアリティの世界は、無限か、どうか。

私は、その答は、事、志（こころざし）と違って、「無限ではないかもしれない」と考える。情報自体は、物質の形の組み合わせだから無限ともいえるが、それを乗せる物質を必要とする。ゆえに情報はその物質としての「乗り物」の量の面での有限性に制約されるからである。だから、情報技術といえども、情報は再利用しても減らないといういう性質を見込んだうえで、無限性への道を、ある程度用意できるだけであろう。

実は昔から人類は、外なる自然のなかで、記号を通じて人工的世界を作って来た。それは外なる自然にたいする社会という空間での「人工的リアリティ」である。これはすべてヴァーチャル・リアリティであるといえる。

現代のそれはエレクトロニクス技術を通じてのものである所にその特徴があるが、自然物ではなく「人工的な記号世界」という本質は、古来のものと変わらない。つまり絵も、写真も、彫刻も、音楽も、狼煙（のろし）も、小説も、詩歌も、演劇も箱庭も、すべて人工的な記号世界であり、ヴァーチャル・リアリティなのである。

今後における人類生命にとっての目的の方向性は、いずれにあるか。結局それは、外なる自然の有限性の中でどうにか許容される「修正された無限追及」でしかないのである。

一方で、外なる自然の有限開発とは、物的リサイクル・システムの構築しかない。むろんそれは容易ではないが、しかし全力をあげて取り組まねばならない。

他方で、人間の「内なる身体的世界」は、無限ではないだろうが、開拓が進んでいない残されたフロンティア

である。

今、その意味で「感性の科学」というものが非常な勢いで発達していることが注目される（篠原ほか『感性工学への招待』森北出版）。これには、脳の科学が密接にかかわり、またそれに情報科学からの人間の研究が結び付く。これが経済にインパクトを与えないはずがない。新世紀の二、三世代にとっては、人文、社会、自然というような科学分類は終わるであろう。心理学なども脳科学に侵食されよう。経済学でも経営学でもまたしかり。

ゆえに、今後の文明では、人間の内部の身体と精神の領域が、一層重要となる。ことに、人工的リアリティの享受（喜び）は、重要な役割を演じるであろう。人類経済は、人工的リアリティの無限性の追及に、その比重を移さざるをえない。技術革新の焦点もそこに向かうに違いない。

それとともに、「心の使い方」、「考え方を変える」ことなどを含めた「心身の技術」の意味が増大するであろう。つまり、一方でのヨーガや気功、その他の健康法、身体の味わいを探求する技と、他方での芸術的生産は、その中心に位置するはずである。芸術の多くは、少しの資源でもって相当程度まで、無限の心の喜びを実現できる領域である。人間の生命力は尽きざる変化を求め続ける。音楽が絶えず流行を変えて行くのもそのゆえであろう。

孔子先生は、『論語』の中でこう言っておられる。

「詩に興（おこ）り、礼に立ち、学に成る」

（人としての教養は、詩によってふるいたち、礼によって安定し、音楽により完成する。）（金谷治訳注『論語』岩波文庫、一〇九ページ）

音楽は教育であり、政治であり、経済である。

宇宙的リズムの次元で、我々の生活の各次元は、一切が通底しているといえようか（この点、中村雄二郎『共振する世界』青土社、が参考となる）。人類の経済活動でも、リズムを自覚的に尊重すべきであろう。

人類における人間性と外界の有限性との調和には、この「内的無限追及」という道しかない。先程私は、「無限ではないかも知れない」と述べたが、無限と有とのあいだの矛盾的統一でもって進むほかなかろう。

これは、かつてヴェルナー・ゾンバルトというドイツの経済学者が、近代経済への批判の中で注目したところ（『ドイツ社会主義』難波田春夫訳、早稲田大学出版部から新たな版が出ている）。近代は物的経済の無限追及の時代であるが、その限界をいかに乗り越えるかという問いを、ゾンバルトは示唆していた。

そうなると、宗教とか、歴史的伝統などにもまた、新たな評価の可能性が開かれる。あの屋久杉が保存されたのは、ある種のタブーがあったからだし、日本の神社には樹木を保存する効用もある。鎮守の森がそれである。良質な伝統文化には、その永続性のゆえに、将来の人類経済の知恵が隠されているのではないか。けだし、永続ということは、厳しい「歴史のテスト」を潜（くぐ）り、合格しているということを意味するからである。

アジア・モンスーン地域の話に限定されるが、「鎮守の森」「神社の森」「寺院の森と庭園」のもつ歴史的な意味

に注目したい。砂漠の「オアシス」にもいえようか。森や水辺は美しいという意味だけでなく、エコロジー的な神秘性が込められている。

しかも単に原始林の野生の保存というだけでなく、人類の「人工による自然の創造的保存」が証(あか)しされているということである。

我々人類が惑星地球の上にへばりついて生きているということは、地球を食べていることである。これが経済の原理である。これはいかように弁解しても仕切れない。しかしながら、それでは救いはないのかというと、あると私は考えている。

それは、森と庭園の工夫に示されていると思う。

森も庭園も――水田や畑や森林は陸上での農業と林業の庭園である。漁業にも庭園が造られるべきであろう。森も庭園も、やむを得ず作られた人工のものでしかないが、最も控えめな「地球の食い破り」であるといえるのである。心身の外においては、このような文明作りの工夫が必要である。

㈣ 経済に関する誤解と偏見を超えて

この拙(つた)ないノートは、もともと経済についてのさまざまな誤解と偏見を解決して、真の経済観を確認することにある。それは、これからの人類の持続的発展への設計図を描くために役立てたい、という狙いから出発した。誤解と偏見は多岐にわたるので、それを追い廻した私の議論も支離滅裂の嫌いがあるが、読者の皆さんの便のために、締めくくりとして、私が行った以上の議論をまとめておきたい。

①経済は物質に関する物事に過ぎない。

この種の見解は、一面ではもっともなものであり、誤解というほどではないが、特に情報革命以後には、経済は情報をも取り扱うものとなり、物質獲得に限定されない。

②経済は利己心にかられた物質獲得という低い次元の価値に関する活動だ。

これは根の深い誤解である。しかし、物質獲得は人間の生命維持に取って不可避の活動である。利己主義に駆られるか否かは、各人の心次第である。経済に付き物の傾向ではない。もちろん、正義と愛の経済に向けての、厳しくかつ真面目な自己訓練は必要なのである

③物と心とを対比すると、「物ではなく心だ」、「物から心へ」時代は動いている。

この見方は、偏見というより、社会状況のつかみ方の問題であるが、物と心とをいきなり対比するのでなく、人間の身体の外部の物質と、身体の内部の物質つまり肉体と、それに身体内部の心つまり情報とを、いかに関連づけるかである。このように問いをもっと正確に書き直すことが必要である。現代の時代は、外界の地球環境の物質は有限となりつつあるから、外の物質をあまり浪費しないようにしようという意味でなら、「物から心へ」というスローガンは有益である。

しかし、物質は価値が低く、精神こそが価値が高いという。さらに物質にかかわる職業は価値が低い、精神に関する職業の方が価値が高いというにいたっては、人間差別にもつながりかねないであろう。

④「物から心へ」というよりも、「物も変わり、心も変わる」というほうが、正しい目配りの効いた命題である。

⑤だから、「心の時代」とばかりいうのは、地球環境の時代というような人類の他の側面から目をそらさせる。そういうマイナスの副作用を伴う。しかも、心といっても、どのような心かが問われるべきである。ただぼんやりと心というだけでは不十分である。地球環境を保存し、他の人間への温かい思いやりをもつ、しかし厳しい競争の中では、強い競争力をつけることも厭わない。こういう多面的な心をいうのでなくてはならない。

⑥情報論から見ると、心は人間の心身の中での情報処理活動である。体はそのメディアであり、「乗り物」である。一方、情報は「乗る物」である。御者（ぎょしゃ）である情報が、身体という乗り物を制御して行く。しかし、身体無くして乗る物なし。肉体と心は不可分である。経済においても、肉体と心とは不可分の関係を保って働く。

⑦経済を多面的に理解することは、人類の生命をより良く発展させることに役立つ。人類は、むろん、その生命の、その心、その体の、必然性からして、外なる自然を開発し続けるだろう。そして地球の有限性という制約に、繰り返しぶつかるだろう。それゆえ、内なる無限の世界を探求するという創造的な努力も、繰り返し求められるだろう。

これからの人類の経済は、内なる無限の探求を目的とし、いかに地球という外なる自然を壊さず、賢く管理して行くかにかかっている。

それに挑戦するには、㈠何より新たな「科学技術」と、㈡「精神技術」、ことに有限性と調和するように、人間性を変革する、あるいは制御するための技術が、求められる。また同時に㈢「社会制度の技術」、つまり有限性の中で人間集団の秩序を形成し維持していく技術も、変革されねばならない。この技術（アート）の三つの位相での創造性の開発こそ、現代経済と人間の根本課題である。

この課題に果敢に挑戦することは、我々の、神聖なる、そして喜びあふれる使命の遂行である。その前提は、人類の経済にかんする誤解を解き、正確な理解を得ることである。このノートは、その目的に向けてのささやかな試みに過ぎない。

読者の皆さん、我々は文殊の知恵を、寄せ合わねばならない。皆さんのご意見をいただければ幸いである。

Fax 0471-75-1144
永安幸正（ナガヤス　ユキマサ）

参考文献（本文中に明示した以外のもの）

（1）ライオネル・ロビンス『経済学の意味と本質』、東洋経済新報社。
（2）アダム・スミス『諸国民の富』、岩波文庫。
（3）カール・メンガー『経済学原理』、岩波文庫。
（4）ジョン・スチュアート・ミル『経済学原理』岩波文庫。
（5）カール・マルクス『資本論』、岩波文庫。
（6）アルフレッド・マーシャル『経済学原理』、東洋経済新報社。
（7）ジョン・メイナード・ケインズ『雇用、利子及び貨幣の一般理論』東洋経済新報社。
（8）永安幸正『経済学のコスモロジー』、新評論。
（9）同『社会科学のこころ』、成文堂。

※ 後世畏るべし、という言葉がある。若者は急速に育つ。学生の浜伸洋君は、原稿の段階で幾度か読み有益な意見を提供してくれた。ここに記して、衷心より感謝したい。